語り継ぐ赤坂・青山

あの日あの頃

赤坂・青山地区タウンミーティング『赤坂青山歴史伝承塾』

第2弾

焼け野原から オリンピックの頃まで

1945-1967

語り継ぐ赤坂・青山 あの日あの頃

赤坂・青山地区タウンミーティング『赤坂青山歴史伝承塾』

終戦直後の焼け野原だった赤坂区役所付近

青山北町1丁目 青山注文洋服店前

緑日で賑わった一ツ木通り

みんなが遊んだ弁慶壕

昔は閑静だった表参道（青山から原宿方向を見る）

都電が走った外苑前

赤坂見附から見た赤坂プリンスホテル

東京オリンピック開催にむけて拡幅された青山通り

はじめに

超高層ビルが林立する赤坂・青山が、70年前は一面の焼け野原だったと想像がつきますか？ 高台からは東京湾から渋谷辺りまで見通せたといいます。近くて遠い戦後20年間の記憶を持つ方々も少なくなりつつある今こそ「まちの記憶」をお話しいただいて形にしなくてはとボランティアが集まり、まとめたのがこの冊子です。項目ごとに担当執筆いたしましたので、それぞれの個性を楽しんでいただければ幸いです。お話からみえてきた流れは以下のようでした。

終戦後の平和の中、人々は生活の建てなおしに汗を流し、街は戦前の姿と賑わいを取り戻しました。起伏に富んだ緑豊かな大地の高台にお屋敷、平地に庶民の住宅と粋な街、大地の縁に神社仏閣が配される江戸以来の街の骨格を残すこの街は、由緒ある町名をもち、大通りを都電がはしっていました。増え続けていた赤坂・青山の住民が減りはじめたのは、オリンピックに向けた大通りの拡幅工事による立ち退きからでした。拡幅された大通り沿いはビル化し、街は分断され、小中学校の子ども数は減少に転じます。しかし大通りを一歩入ると、そこには以前と変わらぬ商店や住宅での暮らしがありました。その後、町名や都電は失われましたが、人々の暮らしぶりが変わったのは、もっとあとの昭和50年ころのようです。

お話や写真、資料のご協力を深く感謝いたします。他にもお話を聞かせていただきたい方々はたくさんありましたが、取材期間が短く叶いませんでした。文中には今日では差別語とされる表現もありますが、語り部の言葉を活かし当時の世相を忠実に記すためとご理解ください。今後の聴き取り、記録や資料・写真の保存や発信を考えているところです。挿絵を赤坂生まれの90歳、木内紫幽さんにお願いしました。この街を愛するみなさんに末永く読まれますよう。

※表紙は東京オリンピック開会式練習風景のイメージです。

目次

はじめに …… 1
昭和35年の赤坂・青山［地図］ …… 3
赤坂・青山 1945年～1968年の出来事 …… 5

学校の思い出 …… 7
・私立が担った幼児の教育
・5校もあった公立小学校
・新制中学校の出発
・私学へ通う小中学生
・60年安保闘争と赤坂・青山の小学生

戦後の暮らし …… 11
・子どもの遊び場
・どこでも野球
・男の子も女の子も
・お屋敷跡も遊び場
・町医者として生きた父
・家族の食事にお母さん奮闘
・米穀通帳は身分証明書の役割
・預金は封鎖、電話は「呼び出し電話」、電気は照明だけ
・大人も子どももお風呂が大好き
・テーラーから洋裁学校経由ファッションの街へ
・VANタウン青山

お祭り・緑日 …… 14
・赤坂・青山の縁日
・赤坂・青山のお祭り
・成長と共に子どもの山車から神輿へ
・祭装束
・お祭当日の様子
・コンビーフの缶から作られた神輿

建物・街並み …… 17
・赤坂の人びとと街の暮らし
・ポツポツと赤坂復興の兆しが……
・赤坂全体の本格的な復興は昭和27年～28年ころから
・東京オリンピックで大きく姿を変えた表町1、2丁目(現元赤坂)
・夜を彩った赤坂の花柳街と外堀通り
・青山の街の原風景
・焼跡からの復興
・東京オリンピックに向けての街づくり
・赤坂・青山の庶民の足

花柳界・グランドキャバレーなどナイトライフ …… 21
・戦後の赤坂と「花柳界」の復興
・花柳界を支えて来た商売
・「夜の街・赤坂」の全盛時代

軍用地の転用 …… 24
・長州藩毛利家下屋敷～歩兵第一連隊～接収（ハーディ・バラックス）～防衛庁～東京ミッドタウン・赤坂中学校（赤坂9丁目）
・広島藩浅野家下屋敷～近衛歩兵第三連隊～都営住宅～ラジオ東京（現TBS）（赤坂5丁目）
・宇和島藩伊達家上屋敷～歩兵第三連隊～接収（ハーディ・バラックス）～東京大学生産技術研究所～国立新美術館・政策研究大学院大学（六本木7丁目）
・郡上藩青山家下屋敷～第一師団司令部・陸軍省青山射的場～都営住宅（南青山1丁目）
・篠山藩青山家中屋敷～陸軍大学校～接収～港区立青山中学校（北青山1丁目）
・山形藩水野家下屋敷～近衛歩兵第四連隊～都立青山高等学校・国学院高等学校・都営住宅など（渋谷区神宮前4丁目・新宿区霞岳町）
・代々木村などの畑地・岸和田藩岡部家などの武家地～代々木練兵場～接収（ワシントンハイツ）～東京オリンピック選手村～代々木公園（渋谷区代々木神園町）

外国文化 …… 26
・占領時代がもたらしたもの
・赤坂の自動車街はもちろん外車ばかり
・ホテルの建設ラッシュと東京オリンピック
・ある少女にとって「外国 イコール アメリカ」でした
・青山通りに吹いたワシントンハイツの風
・青山には「日本で一番初め」がいっぱい
・移動遊園地
・クリスマス

戦後の庶民の娯楽 …… 29
・ラジオの楽しみ
・テレビの楽しみ
・映画の楽しみ
・その他の娯楽

オリンピック …… 33
・オリンピックの東京開催決定
・道路や競技施設の建設～青山通りがオリンピック道路に
・赤坂・青山地区のオリンピック関連道路
・青山通り
・外苑西通り
・六本木通り
・赤坂・青山住民にとっての東京オリンピック
・開会式の日、聖火リレーが赤坂・青山をかけぬけた

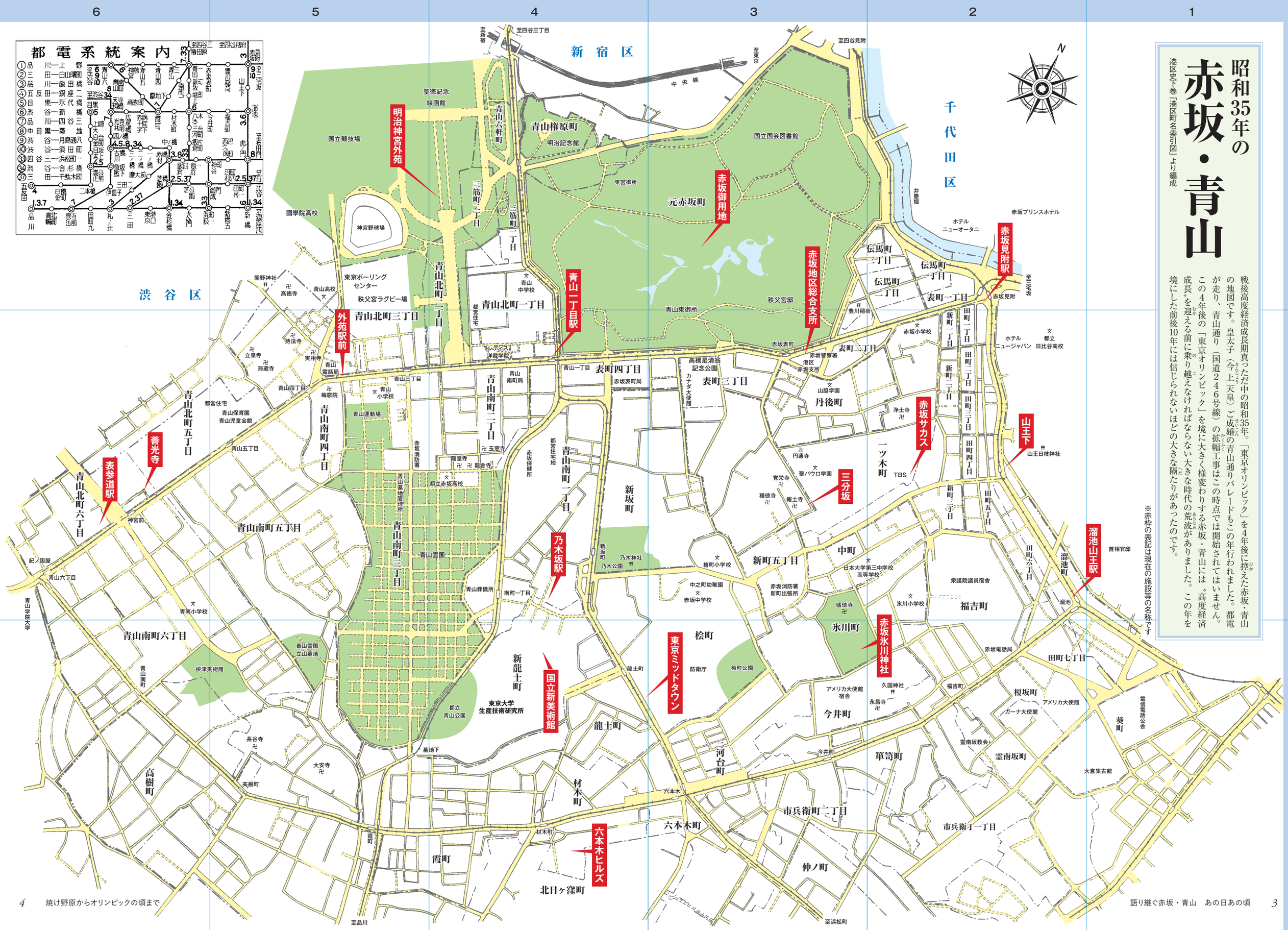
取材こぼれ話～今もあるもの・今はないもの～ …… 36
赤坂・青山地区 区民情報　あの日あの頃 …… 37
あとがき・協力者一覧 …… 38

昭和35年の赤坂・青山

港区史下巻「港区町名索引図」より編成

戦後高度経済成長期真っただ中の昭和35年。「東京オリンピック」を4年後に控えた赤坂・青山の地図です。皇太子（今上天皇）ご成婚の青山通りパレードもこの年行われました。都電が走り、青山通り（国道246号線）の拡幅工事はこの時点では開始されてはいません。この4年後の「東京オリンピック」を境に大きく様変わりする赤坂・青山には〝高度経済成長〟を迎える前に乗り越えなければならない大きな時代の荒波がありました。この年を境にした前後10年には信じられないほどの大きな隔たりがあったのです。

※赤枠の表記は現在の施設等の名称です



語り継ぐ赤坂・青山

あの日あの頃

焼け野原からオリンピックの頃まで

赤坂・青山の街が育んだもの

港区が昭和22年（1947）3月15日に成立して68年。それまで赤坂・青山はあわせて「赤坂区」で赤坂地区総合支所は「赤坂区役所」でした。その名残で20年ほどの間、住居表示は、港区赤坂伝馬町○○番地、港区赤坂青山南町○○番地などとなっていたのです。

赤坂・青山は徳川時代に幕府が武蔵野台地を開発して武家地とした江戸の山の手城南地域に属します。江戸城外濠に設けられた赤坂見附から厚木大山に通じる街道（青山通り）の両側に広がる地域で、渋谷村の手前の青山までが江戸市中でした。緑豊かな起伏の多いこの地には、紀州徳川家（赤坂御用地）、郡上藩青山家（青山墓地など）、篠山藩青山家（明治神宮外苑など）をはじめ多くの大名屋敷があり、今も紀伊國坂・南部坂・青山・高樹町通りといった地名にその記憶をとどめています。武家の消費をまかなうために低地には町人地が設けられました。赤坂見附門外から虎ノ門近くまで溜池が濠の役目をしていました。

明治時代になると、高台をしめる広大な大名屋敷は仮皇居・御所や宮家・華族の屋敷、軍用地や墓地に転用され、台地の斜面や低い部分に広がる旗本・御家人の屋敷地は役人・軍人の住宅地に、低地の町人地は、店が住まいを兼ねる商工業地や、陸軍将校や官吏を顧客とする新興花街となっていきました。かつては風光明媚な江戸の名所であった溜池はすっかり埋め立てられ、商店や料亭で賑わいます。屋敷や住まいの主は変わっても、旧武家地・町人地はそれぞれの雰囲気を、寺社は廃仏毀釈・神仏分離の憂き目をみながらも変わらぬ姿を残していました。やがて、江戸以来の森の中に、赤坂離宮や国会議事堂、軍隊や霊南坂教会、宮家や華族の屋敷、大使館などの洋風建築がそびえ立つ、新旧・和洋のコントラストが魅力的な、しかも秩序と品格のある街並みが形づくられます。そこには、多様な文化をもつ人々が触れ合うなか、独特な気質が育まれていきました。わけへだてせず、つかず離れずのおつきあい、踏み込まないが温かい、ハイカラなのに保守的という、江戸っ子ながらどこかおっとりとした赤坂・青山っ子の気質です。

威張りも遜りもしない気質は、昭和20年（1945）の山の手大空襲によって街のほとんどすべてが焼き尽くされても、街並みとともに蘇えり、受け継がれてきているのです。

戦後、広大な軍用地跡やお屋敷跡は幾多の変遷をたどり、近年の再開発で東京の新名所やタワーマンションとなりました。願わくは「山の手の江戸っ子」のレガシーを次世代に。

赤坂・青山地区タウンミーティング『赤坂青山歴史伝承塾』

赤坂・青山　1945年～1967年の出来事

西暦	元号	赤坂・青山	世相
1945	昭和20	東京大空襲（青山南町の一部空襲） 山手大空襲 旧代々木錬兵場に米軍駐留地ワシントンハイツ竣工 明治神宮外苑がGHQにより接収され、メイジパークとして米将兵の運動場となる	ポツダム宣言受諾・第2次世界大戦終結 待合茶屋・バー・料亭などの営業許可 財閥解体本格化 女性参政権が承認
1946	昭和21	赤坂青山北町および南町に都営住宅（応急簡易住宅）建設	日本国憲法公布 第17回メーデー　全国で200万人が参加 新円の交換開始
1947	昭和22	旧赤坂区の5つの国民学校が、赤坂、氷川、檜町、青山、青南小学校と改称 赤坂、新星中学校創設 旧芝・麻布・赤坂の3区が統合され、港区が誕生	新学制が施行、義務教育は9年間に 東京都23区制になる 町会・隣組禁止
1948	昭和23	新星中学校が青山中学校に改称	大韓民国成立 朝鮮民主主義人民共和国成立
1949	昭和24	赤坂小学校新校舎落成	中華人民共和国成立
1950	昭和25	第一師団司令部跡に都営アパート建設	朝鮮戦争が勃発、特需景気
1951	昭和26	陸軍大学校跡に鉄筋の都営アパートを建設	
1952	昭和27	青山に民間初の東京ボウリングセンター開業 明治神宮外苑各競技場の接収解除 皇太子「立太子礼」「成年式」青山通りをパレード	サンフランシスコ講和条約の発効・GHQ廃止 町会禁止解除 皇太子「立太子礼」「成年式」
1953	昭和28	日本初のセルフサービス・スーパーマーケット「紀ノ国屋」開業	NHK、日本テレビが初の本放送開始
1954	昭和29	赤坂中学校、現在地に新校舎が完成 明治神宮外苑で移動遊園地「コニーアイランドショー」開催	ベビーブームで小学校の新入学が前年より激増 東京の完全失業者が50万人を突破 電気冷蔵庫、洗濯機、掃除機が「3種の神器」と呼ばれる 神武景気
1955	昭和30	ラジオ東京（現TBS）が赤坂に移転、テレビ放送開始 青山中学校が旧陸軍大学校舎に移転 「赤坂プリンスホテル」開業	東京通信工業（現ソニー）、初のトランジスタラジオを発売
1956	昭和31		経済企画庁経済白書　「もはや戦後ではない」が流行 日本住宅公団、初の入居者募集
1957	昭和32		鍋底不況
1958	昭和33	赤坂に「コパカバーナ」開店	東京タワー完成 岩戸景気 白黒テレビの受信契約数100万台を突破 日清食品、初のインスタントラーメンを発売
1959	昭和34	赤坂に「ニューラテンクォーター」「ミカド」開店 皇太子ご成婚　青山通りパレード 地下鉄丸の内線（霞ヶ関ー池袋間）延伸開業（赤坂見附駅含む）	皇太子（今上天皇）ご成婚 首都高速道路公団設立
1960	昭和35	「ホテルニュージャパン」開業	池田勇人内閣の「所得倍増計画」 新「日米安全保障条約」強行採決（60年安保）
1961	昭和36	オリンピック関連道路建設開始	カラーテレビ本放送開始
1962	昭和37	「ホテルオークラ」開業	コカコーラの自動販売機が登場 日本住宅公団（東京）の申し込み競争率52.5倍 フリーザー付き冷蔵庫が出現
1963	昭和38	青山に地権者と日本住宅公団による、4棟の高層共同ビルが完成 「東京ヒルトンホテル」開業 「VAN」北青山に本社を移転 オリンピック関連道路整備により、都電「北青山一丁目ー三宅坂間」廃止	日本初の衛星放送でケネディ大統領の暗殺が報道 フジテレビ、アニメ「鉄腕アトム」の放送開始
1964	昭和39	24時間営業のスーパーマーケット「青山ユアーズ」開店 ワシントンハイツが返還され、オリンピック選手村・国立代々木競技場竣工 「ホテルニューオータニ」開業	東海道新幹線開業 東京オリンピック開催
1965	昭和40		「VAN」「JUN」アイビールック流行
1966	昭和41	「住居表示に関する法律」施行（町名変更）	早川電機（現シャープ）、初の家庭用電子レンジ発売 カラーテレビ、クーラー、カーが「新・三種の神器」（3C時代）に ヒノエウマで出産数が今世紀最少 いざなぎ景気
1967	昭和42	都電の全面的廃止がはじまる	

焼け野原の学び舎に響く、子どもたちの声

赤坂・青山の幼稚園や国民学校は昭和20年（1945）5月の空襲を受け焼失したり、焼け残っても近所の人たちの避難所・救護所などに使われ、荒れるにまかせた状態でした。8月の終戦を迎え、9月から授業を再開。22年度に6・3・3・4の新学制が始まると、国民学校は小学校と改称、新制中学校が創設されます。40年ころまでの赤坂・青山で育った方々に、地域の学校の思い出をお聞きしました。

私立が担った幼児の教育

幼稚園・保育園は戦時中休園し、空襲被害を受けました。区立青山国民学校付属幼稚園は焼失し閉鎖、中之町幼稚園［地図B－3下］は大破したものの焼け残り再開し、Mさんが通った昭和30年ころまでは1年保育だったようです。私立では霊南坂幼稚園、青山南町幼稚園が再開し、新たに青山幼稚園、善光幼稚園、赤坂幼稚園ができました。一ツ木通りの浄土寺では、幼稚園が足りないので近所の子どもを預っていたところ、芝で幼稚園を開いているお寺の勧めがあり、27年（1952）に赤坂幼稚園を開いたそうです。赤坂・青山のお寺の幼稚園は象の造り物を順に回して花祭（4月8日：釈迦の誕生日）を祝っていました。青山南町幼稚園はピアニストの江戸京子の祖母にあたる田中さんが園長で、和服に上っ張りを着ていたそうです。渡り廊下の先に園長の自宅があり、園児たちは冬はそこの掘り炬燵にお弁当を温めに行きました。昭和30年代初めはトイレが水洗ではなく、暗くじめっとしていて園児たちは怖くて入れず、庭の溝にみんなで並んで用を足し、近所から苦情が来たそうです。保育園ははじめは私立青山保育園だけでした。昭和40年ころまでの幼児教育はほとんど私立が担っていたのです。幼稚園や保育園には行かずに小学校に入学する子どももいました。

5校もあった公立小学校

◇焼け野原に復興した小学校

旧赤坂区にあった赤坂、氷川、乃木、青山、青南国民学校は終戦直後の昭和20年（1945）9月に再開し、22年（1947）の新学制でそれぞれ「赤坂」、「氷川」、「檜町」、「青山」、「青南」小学校と改称しました。当時の赤坂小学校は赤坂見附近くの青山通り牛鳴坂にあり、氷川小学校は現区立サンサン赤坂、檜町小学校は現赤坂小学校です。

赤坂国民学校［地図B－2上］は空襲で全焼し、氷川と青山の国民学校に分れて間借りして授業再開、昭和24年（1949）に元に戻りました。復興時の木造新校舎は6教室のみ、講堂もなく、授業は2部制で、学芸会などは2教室ぶちぬいて行われました。学区域の児童を収容しきれなかったので、となりの檜町小学校や千代田区の永田町小学校へ入学する子どももいました。放課後の学校への出入りが自由だったので、一ツ木通りの貸自転車屋さんで借りた自転車を校庭で乗ったりしました。木造校舎は徐々に増築され、モダンな鉄筋校舎が昭和30年代後半にできました。

赤坂小新校舎落成（第1校舎）　昭和24年

氷川国民学校［地図B－2下］の鉄筋校舎は戦災にも焼け残り、赤坂小学校の児童が本校に戻ったあとの昭和24年（1949）7月から29年（1954）3月まで新制赤坂中学校が間借りしていましたが、児童数は戦前より少なく教室は足りていました。そのころは、1学年2組で男女一緒、6年間クラス替えがなく持ち上がりだったので、卒業後も今日まで恩師や同級生と付き合いがあるといいます。

乃木国民学校［地図B－3］も鉄筋校舎で焼け残りましたが、昭和21年（1946）の校庭にも水がたまったプールの中にも鉄くずの山、毎日の朝礼の後は必ず校庭の石拾いでした。都立赤坂女子商業学校（後の都立赤坂高校）が3階に間借りしていました。校舎の屋上からは富士山や国会議事堂が見えました。23年（1948）になっても、戦争中に高射機関砲銃座が据えられていた塔屋が屋上に残っていて、子どもたちが遊び場にしていましたし、講堂の屋根には爆撃を受けた穴があいていて、その瓦礫の片づけを児童も手伝ったそうです。帰宅後の子どもたちは集団で焼け野原に家が建ち始めた街を真っ暗になるまで遊びまわりましたが、教育熱心な母親に日本舞踊を皮切りに学習塾やそろばん塾などにも通わされ、遊んだ記憶はないという女子もいます。

焼け野原となった青山小のまわり

青山国民学校［地図B－5］の鉄筋校舎は残り、木造校舎が焼失しました。昭和21年（1946）に疎開先から戻ったNさんは「父親が焼け跡に雨露をしのぐだけのバラックを作って待っていてくれました。バラックの柱は焼け焦げた柱で、トタンには穴ぼこが空き、畳なんかありませんでした。そこから学校へ行きました」。その校舎は30年代まで使われ、「ものすごくどっしりした建物で、今もある細い入り口を入るとU字型でどーんとした石造りの玄関がありました」とHさんは回想します。

青南国民学校［地図B－6下］は校舎のコンクリート部分のみが焼け残りました。戦後初めての卒業式はガラスが入っていない焼け校舎をバックにして行われました。昭和22年（1947）にMさんが戻ってきた時、疎開先の男の子たちは皆丸坊主だったのに青南では数人が「坊っちゃん刈り」の頭に白い襟の紺の上下の服や、きれいなセーターを着ているのでびっくりしたそうです。戦前の青南小をとりまく青山の環境を戦後も引き継いでいたのでしょうか、比較的上流の生活者がクラス50名余の三分の一は占めていたようです。引揚者などもいましたが、クラスの中では皆仲よくし、軍隊帰りの若い先生が「新しい憲法の話」の小冊子を目を輝かせて説明してくださったのをよく覚えているそうです。

26年（1951）の入学式を終え、教室に入ったとたんに隣りのクラスの男子とケンカしたというKさんのような「腕白坊主」もいました。同年のSさんは、男の子同士でメンコをしながら「日本でイチバン偉いのは天皇陛下ではなくマッカーサーだ」と話し、給食もみんなが「アメリカさんのお陰だ」といっていたといいます。28年（1953）に転入したMさんは、ローマ字学習で疎開先の小学校との大きな学力差を感じました。青南小は、戦前からの進学校で、当時も児童700人ほどいたうちの300人くらいは世田谷や渋谷からの越境だったせいか卒業生のつながりはあまり密ではないようです。

◇教室が子どもであふれた昭和30年代

昭和30年代は団塊世代が学齢期に達し、赤坂・青山でも子どもの数が最も多く教育熱も高まった時代です。「青山小学校では学年6クラス、1クラス60人くらいいました。帰宅後は青小も檜町小も関係なくボスのもと徒党を組む男子の中に女子の私も交って遊びました。宮益坂の楽器店で、姉がピアノ、私はバイオリンをお稽古しました」とHさん。「当時は都電の墓地下から霞町あたりの線路沿いに木でできたバタヤさんの家がずらっと並んでいて、そこから小学校に来ている子もいました。当時はみんな何もないので貧富の差がそれほど目

立たなかったため、いじめはなかった」そうです。

氷川小学校には「当時花柳界から来ている子弟が結構いて、どの学年、どの組にも芸者さんや2号さんの子どもが多かった」そうです。古くからの商家の息子さんいわく「芸者衆の子どもたちに対して、子ども心に差別はないんですよ。お金は持っているし、顔はいいし、頭がいいから、それはある種尊敬しちゃうよ。うちのおとっつぁんよりも、この子のおとっつぁんの方が立派なんだ、なんて思うとね」。またある人は「赤坂は複雑な家庭環境の子が多かったため、子どもながらに情があり皆よく分かっている感じだった」といいます。

赤坂・青山の小学校の遠足は新宿御苑や上野公園などでした。赤坂小学校に30年（1955）入学のIさんは上野公園には都電の貸切で行き、青南小学校に36年（1961）入学のFさんも同じで、座席が足りず、じゃんけんで交代で座ったそうです。

30年代後半になると、青南小学校学区域の開業医であったFさん宅では「区域外の人から寄留を頼まれることが多かった反面、地元の友達は外苑西通りを通す工事の立ち退きでいなくなった」といいます。同じころ、赤坂小学校はTさんが入学した31年（1956）に全校500名位で1学年3クラスだったのが1学年2クラスに減り、Fさんが転校してきた39年（1964）には1学年1クラスでした。この時期、越境入学が多い青南小学校、オリンピック道路が学区域にかからない檜町小学校を除く赤坂・青山の公立小学校は児童数を大きく減らしました。

新制中学校の出発

昭和22年（1947）に新学制が施行され、義務教育が中学校までの9年間になり、校舎建設が間に合わない新制中学校が多く、赤坂・青山も例外ではありませんでした。

生徒の服装は様々だった

◇赤坂中学校の思い出

昭和22年（1947）に檜町小学校内にあった都立赤坂女子商業学校に間借りして開校、24年（1949）からは氷川小学校に間借りした後、29年（1954）4月に旧軍用地の現在地に独立新校舎が落成して移転しました。その時入学したEさんの同期には西園寺公望や木戸孝允の曾孫、淡谷のり子の姪、女優の十朱幸代などもいれば、地元の商店、引揚者、清元の師匠、置き屋の子どももいましたが、みな普通に付き合っていました。Mさんが33年（1958）に入学した時は、男子は詰襟の学生服ですが、女子はセーラー服やテーラーカラーの上着、カーディガンなど様々で、黒の布製の手提げカバンでした。若く熱心な先生が多く、活気にあふれていたといいます。

39年ころ息子さんが在学したKさん。当時はお弁当で、赤坂小学校からの生徒には皇宮警察関係の子どもが多く、檜町小学校出身で商店街育ちの息子さんは自分とは違う育ち方をした人たちと出会ったといいます。英語教育の一環としていちはやくLL教室（Language Laboratory〈言語実習室〉）が設置され新聞に載ったとも。少し後輩のFさんは「東京オリンピックの通訳経験がある英語の先生がネイティブを招いたりLL教室を使ったりしていた。ユネスコに協力してグループ学習で海外の事を調べて発表し外国人見学者も来た。夏休みの宿題は自由研究のみであった。先生方がえこひいきしないので生徒も分け隔てがなく、上級生には大名の子孫もいたが少しも知らなかった」といいます。

◇新星中学校・外苑中学校から青山中学校へ

青山中学校は昭和22年（1947）に旧制都立第一中学校（現日比谷高校）内に開校した新星中学校に始まります。新星中学校の第1期生のUさんは当時をこう語ります。「新星中学校には男子のみの約100名が、女子の対象者約100名は都立外苑中学校（現青山高校内）にわかれて入学した。新星中の教師は3名が専任で校長そのほかの先生は旧制第一中学校の教師が兼務し教室も区分されていなかったので校内で違和感はなかったが上級生はずいぶん大人っぽく感じた。当時は青山1丁目～赤坂見附間を都電で通学したが、翌年に焼けた鉄筋校舎を内装した青南小学校に移転し、青山中学校と改称、教師の何人かは旧制第一中学校から転籍してきた。同時に外苑中学校から女子が合流して、半年は2部授業だった。第1期生は卒業まで男女は別々のクラスのままだったが第2期生は初めから男女混成で卒業時は混成4クラス男子2クラスだった。青山の焼け野原で学生がやっている塾に通った」そうです。同期のSさんは「カバンは白いズックか何かでできている物があったが、統一もされていなかったので、それよりも、ひもで十字にしてブックバンドみたいなのを持っているのが格好よかった。襟章、バッジは1期生から募集して決めた」といいます。

中学3年間を青南小学校の3階で過ごしたNさんは、「運動場は小学生が使っていたので中学生の朝礼は屋上を利用し、そこからは渋谷方面までずっと良く見えた。運動会は当時何もない土の広っぱだった港区総合グランド（現青山斎場）で行われた。青南小から草ぼうぼうのグランドまで青山墓地を下って上り、運動用具、テント、来賓や父母用の机や椅子などを両腕に抱えて運んだ。キャーキャーふざけながら泥んこになって、とても楽しかった」といいます。

30年（1955）に旧陸軍大学校の校舎を改修した新校舎（現在地）へ移転。新校舎の前にある赤坂御所を一周するマラソン大会は男子のみ、女子はドッジボールでした。

30年代半ばには学年13クラスにもなり、増築されましたが大きな煙突が残る旧陸軍大学校の鉄筋校舎は健在でした。

私学へ通う小中学生

「赤坂・青山は裕福な家庭が多く、地元に青山学院、実践、日大三、聖パウロ、山脇があり、慶応、暁星、雙葉、白百合、東洋英和、麹町、共立などへの交通の便が良かったので義務教育段階から私学へ通う子どもが多くいました」。電車通学していた子どもたちは地元に友人はなく、近所の子どもと遊ぶことはなかったといいます。男子のNさんは自転車で本屋や電気部品店などへ遠出しましたが、女子のMさんは縁日でもお手伝いさんに連れて行ってもらっていました。Mさんの弟さんは地元の公立小学校へ通い、外で自由に遊んでいたといいます。女子の方が私学志向が強かったと皆さん口を揃えます。

60年安保闘争と赤坂・青山の小学生

一番印象に残った出来事をお聞きしたところ「60年安保で東大生の樺美智子さんが亡くなった時」という方々がいました。

「青山通りはデモ隊ですごかった。国会が近いので、年中ワーワーという騒ぎの中にいた。そんな雰囲気だったので、当時は青山小の6年生だったが、近所の子と『おまえ安保どう思うんだよ』なんて論争していた」と青山1丁目に住んでいたHさん。

同年で赤坂見附に住んでいたTさんも「国会が近いので、60年安保闘争の時は街が騒然としていた。樺美智子さんが亡くなった日のことは、一晩中救急車が走り回り前田病院や山王病院へ怪我人を運ぶサイレンが聞こえていたので忘れられない。それ以前は国会の周囲にしっかりしたフェンスがなく敷地に入って遊んだのだが……」といいます。

さようならお屋敷、ハローおしゃれ

物資不足でインフラもない焼け跡から始まった暮らし。どこまでも続く焼け野原でのバラック住まいに配給の食料をやりくりしガスの供給制限下の暮らしでも、子どもたちの笑い声が響いていました。衣料品統制が解けると洋裁学校や個人の洋裁教室も増え、おしゃれを楽しめるようになりました。オリンピックの立ち退きで友だちが引っ越し寂しい思いもしました。

子どもの遊び場

焼け跡は子どもたちの自由な遊び場。
野球、缶けり、鬼ごっこ。
広場に明るい声が響きます。
焼け野原はポツリポツリとバラック状態。
赤坂・青山っ子たちにとって空地は楽しい遊び場でした。

どこでも野球

「子どもの時には野球しかないんです」とKさん。通りでも、車はほとんど通らなかったので野球をすることができました。「赤坂小学校までの道の真ん中で、電信柱を一塁、二塁にして、三角ベースをたくさんやった」とAさん。バットやグローブは貴重品だったので、新品ではなく物物交換で中古品を入手しました。「グローブは、みんなは厚手の雑巾みたいな布製だった。僕のは革製だったけどね」とSさん。「中学生でアカネという少年野球チームに入って、青小まで歩いて外苑で練習した。あちこちに空地があってどこでも野球ができた」とOさん。「放課後はコンクリの校庭ですけど借りて野球をやったんですよ。姉に作ってもらったズックのグローブ。運動靴も、ろくにないから裸足」とIさん。本当に野球が大好きなんですね。

道の電信柱をホームベースにして三角ベースをたくさんやった

男の子も女の子も

「昭和23年（1948）、11歳の頃、友だち4、5人で、貸し自転車を借りて乗り回して遊んだ（1時間10円か20円）。当時は黒塗りの車が1時間に1台くらいしか通らなかったので表参道をジグザグ思う存分走り回っていた。青山通りには荷馬車も走っていた。水溜りもあった。雑草の中から四葉のクローバーを探した」とMさん。「石段の多い街で、じゃんけんのグー、チョキ、パーをしながら上がり下がりして遊んだ」とOさん。「日枝神社の下に池があり、ザリガニやエビガニを捕りに行った。池で筏を浮かべて遊んだ」とTさん。「縁台将棋のおじさんから将棋を教わった」とHさん。「チャンバラごっこ、ドッジボール、めんこ、ベーゴマや防火貯水池で泳いだ。紙芝居も来ていた」とSさん。「小学校の時は男の子も女の子も一緒に遊んだ」とYさん。

貸し自転車で表参道思う存分ジグザグと

お屋敷跡も遊び場

「戦後、近衛歩兵第三連隊（現TBS）の所に赤レンガの建物が残っていてよく遊んだ。氷川神社前の三井邸、黒田邸、一条邸、九条邸などのお屋敷跡で遊んだ。三井邸は広い地下でかくれんぼ。黒田邸は庭の広い池でエビガニ捕り。一条邸のれんげ畑で首飾り作りや、庭の木でセミやカブトムシ捕り。九条邸の焼け跡に残っていた食器でおままごとをした」とTさん。

町医者として生きた父

「父は青山南町で内科・産婦人科医をしていました。戦時中は軍医もしていたそうです。『口と皮膚以外』はなんでも診て町医者に徹していました。指を詰めたヤクザ、治療費が払えないキャバレーのホステスなども診て、町でヤクザに『やー』と挨拶されたこともありました。病気以外の話も良く聞き診察時間が長くかかりました。15時からは往診。夜も18時から21時まで診察。最新医学の勉強にも参加。忙しい中、少しの暇を見つけて食事をとるので、食事がすぐに出ないと怒って家族は大変でした。」

家族の食事にお母さん奮闘

終戦直後、お母さんは配給の主食（米・大豆・トウモロコシ）を混ぜ、うどん・すいとん・パン・団子を工夫して作りました。不足分は買い出しに行きましたが、検査で没収されたことも。庭や空き地に野菜を植え自給自足で奮闘しました。昭和23年（1948）ころから「千葉の小母さん」が背負い籠に野菜や魚・花を満載して家々を訪ね、売り歩いていました。青山のお屋敷の「おじいちゃま」が飼う鶏の卵まで、出入りの酒屋さんが卸してくれというほど扱う品が不足していました。「赤坂の『とらや』にさえ材料がなく、トウモロコシ粉や小麦粉を持っていってお饅頭を作ってもらった。贅沢みたいでしょう？でも、ちっともおいしくなかった」とSさんはいいます。

小母さんが入ってしまうほど大きい竹籠

米穀通帳は身分証明書の役割

米は配給制で、一定の地域に一軒と定められ営業免許を受けた米屋が販売することになっていました。世帯ごとに米穀通帳が発行され、米が配達されました。「担当の家に決められた量を配達すると、その月は仕事がないこともあった」とお米屋さんのYさん。「大きな屋敷にお米を届けるときはいつも勝手口から入り、お手伝いさんが受け取るので、誰が住んでいるのか、どんな生活をしているのかまったくわからなかった」そうです。米穀通帳には家族の氏名・人数・配達量が記載され、今の健康保険証と同じように身分証明書の役割を果していました。

身分証の役割も担っていた米穀通帳

預金は封鎖、電話は「呼び出し電話」、電気は照明だけ

お金は、預金が封鎖され決まった額しか下ろせず、新円切り替えで銭という単位がなくなり、貨幣価値が下がりました。電話の加入は昭和27年ころ順番待ちで債券を買わされ、電話のない家が多く「呼び出し電話」でした。電話のあったUさんは、近所の家に電話がかかると雨でも雪でも駈け出して呼びに行ったとか。近所の人の名刺にはUさんの電話番号の脇に（呼）と刷ってあったそうです。一般家庭の電気製品は照明だけで扇風機があれば良いほうでした。冷蔵庫は朝夕氷屋さんが来て氷を入れる方式、暖房は掘り炬燵や瀬戸物の容器に豆炭を入れる「ねこ炬燵」でした。

大人も子どももお風呂が大好き

終戦直後はドラム缶の五右衛門風呂で、中に板を浮かせその板の上に載って沈んでいくものでした。少しの板塀で囲ってはいましたが外ですから

丸見えです。近所の人が交代で入りました。寒くなると焼け残った銭湯を求め地下鉄に乗り虎の門まで行くこともありました。そのころの銭湯は毎日の営業ではなく大変混雑していて脱衣籠は奪い合いでした。籠が足りないので脱いだ服の風呂敷包で床は足の踏み場もないほどでした。昭和24、25年ころ街に銭湯が開かれましたが、自宅にお風呂があっても銭湯に行く人が多く、大人にとっては社交場であり、また雑学を学ぶ場でもありました。子どもにとっては遊び場で、学校から帰ると悪ガキが集まり営業前に籠を積んだり、崩したりして遊びました。石鹸をお尻に当てて滑ったりして3時間くらい遊んでいて、その時は子どもはお風呂代がただと思っていたら後で親が払いに行っていたことを知りました。銭湯には背中を流す三助さんもいて料金は入浴料の2倍でした。

大人にとっては社交場、子どもにとっては遊び場だった銭湯。

テーラーから洋裁学校経由ファッションの街へ

戦前の軍隊御用達の仕立屋や手袋専門店はテーラーや洋品店となり、青山にテーラーが一軒一軒増えました。赤坂には花柳界を顧客に呉服屋、宮家御用達の仕立屋があり、戦後青山に第一号店を開いた「君島一郎」も皇室御用達でした。女性のたしなみとしてミシン縫いの洋裁が爆発的に流行。米国から取り寄せた型紙でオーダーする家庭がある一方、着物地・放出品の毛布や背広の裏返しなど限られた材料で工夫しました。青山1丁目の「レディス洋裁学院」、目黒の「ドレスメーカー女学院」新宿の「文化服装学院」が洋裁学校御三家でした。「紙ドレス」のファッションショーのはしりを銀杏並木で見た人もいます。青山通りをワシントンハイツから銀座まで専用バスが運行していたあのころ。GHQの将校夫人がミシン店の看板を見て修理依頼に来たり、今も続く帽子ブティックに見本市会場を提供したりしました。洋服地とお揃いで誂える山の手スタイル・トータルファッションの時代がありました。

ミシン縫いのワンピース。輸入服地と思われる（1950年ころ）

着物地を転用した手縫いのエンパイアラインのドレス。60年前に製作されたがいたみは無い（2014年）

VANタウン青山

東京オリンピックの再開発でテーラーの街青山に新住民が移り住んできました。昭和38年（1963）北青山3丁目に石津謙介氏率いるVANギャケットが進出してきました。

「細身のズボンに少し尻が出るくらいの短めのジャケット。足元はペニーローファーで決めたね」とSさん。愛読誌は平凡パンチ、数寄屋橋阪急のVANショップが贔屓だった」Aさん。石津さんがワインを求めた酒屋のUさん。若者はみんなVANスタイルに感化されていきました。「今じゃ普通だけど『食事に合ったお酒が欠かせない』と50年も前にね」と語ります。高級ソファのアルフレックスや雑貨のオレンジハウス、後VAN99ホールなどを展開しライフスタイルにファッションを提唱、青山が個性的なファッション街に変貌していく牽引力でした。青山高樹町町会の法被は「コシノ・ジュンコ」デザイン。80年余の続く呉服屋さんも「屋号から『青山』は外せない」と語ります。

お祭り・縁日

金魚すくい、ヨーヨー、神輿。住民の楽しみはお祭りや縁日でした

娯楽や遊びの少なかった当時、縁日やお祭りにでかけるのは、人々のささやかな楽しみでした。戦後の赤坂・青山地区では、定期的にたくさんの縁日やお祭りが開かれていました。縁日の露店で金魚すくいやヨーヨーをしたこと、少ないお小遣いから綿飴やあんこ玉を買って食べたこと、地域のお祭りで子ども用の山車を引いたこと、憧れだった大人用の神輿をかついだこと――。そこにはいつも、たくさんの人の笑顔や幸せな時間が流れていました。

赤坂・青山の縁日

赤坂では、1の日と6の日に縁日がありました。それは、浄土寺のお地蔵さまが一六（いちろく）地蔵であったからで、元来は浄土寺の縁日でした。空襲で一度途絶えたものが、昭和23年（1948）ころから復活しました。一ツ木通りの商店街の方たちが、街をにぎやかにしたい、縁日があると人が来る、というので浄土寺さんに働きかけ、四谷の方にいた露天商の親方がお寺に挨拶に来たそうです。品のいい礼儀正しい親方でした。ところが戦後GHQの一寺社一縁日という規定があったので、赤坂不動尊にお願いをして1の日をお不動さま、6の日をお地蔵さまの縁日としたそうです。一ツ木通りで月に6回も縁日があったのです。

当時の商店は朝が早く、夜は6時ぐらいには閉まります。お店が閉まるころに縁日が始まりました。戦前のように通りの両側ではなく、赤坂不動尊、浄土寺のある西側だけでしたが、1の日は赤坂不動尊に近い青山通り寄りに、6の日は、浄土寺に近い現在のビズタワー寄りに露店が多く出ていました。6の日の縁日の方が露店が多く出て、人出も多く歩けないほどの人混みで、とても賑わいました。

子どもたちは、お手伝いをしてお小遣いをためたり、小銭をもらったりして、縁日で遊ぶのをとても楽しみにしていましたが、中にはお金を持つことを許されず、まして買い食いなどもってのほかといわれた子どももいました。

青山には善光寺と梅窓院の縁日がありました。見世物や露店が沢山出ていました。

縁日では皆、金魚すくいやヨーヨーを楽しみました。焼きそばやバナナの叩き売り、食べ物やお菓子の露店の他にも、植木屋さん、蛇使いや蝦蟇の油売りなどの怪しげなお店もありました。縁日は生活必需品の買い物をする場でもあり、子どもから大人まで楽しめました。

近所の人は、金魚屋さんやおでん屋さんなどに頼まれれば水をあげたり、電気を貸したりして、快く協力し、地域の行事として縁日を盛り上げました。

一ツ木通りの裏にはしもた屋もあり、人が大勢住んでいましたし、商店街で働く小僧さんたちも沢山いて縁日はとても賑わったのです。37～38年ころから青山通りの拡幅で周辺の住民が減り、50年（1975）ころから歩道の工事が始まり（57年（1982）に完成）、縁日はだんだんと規模が小さくなり、次第になくなっていきました。

赤坂・青山のお祭り

GHQにより、昭和27年（1952）まで町会組織の結成が禁止されていて、表向きはお祭りも禁止されていましたが、実際にはお祭りは行われていました。

赤坂では、氷川さん、豊川さん、山王さんと呼んで親しまれた赤坂氷川神社、豊川稲荷、日枝神

社（千代田区）のお祭りが楽しめました。日枝神社では人間ポンプ（ガソリンを口に含み火を吹いたりするなどの芸）が出ていました。

赤坂氷川神社のお祭りは戦後すぐに復活し、数年経つと、24町会全てが神輿を出していました。大人の神輿の他に、子ども神輿や子どもの山車も出揃いました。

青山地域には金王八幡宮、熊野神社、渋谷氷川神社（いずれも渋谷区。ただし、氏子の範囲は行政区と異なる）の3つの神社の氏子の区域があり、外苑西通りを境にして西側が金王八幡宮の氏子、東側が熊野神社の氏子でした。南青山7丁目の山笄町は渋谷氷川神社の氏子の区域となっています。

赤坂氷川神社のお祭りの様子

豊川稲荷の節分の様子

戦災で焼けてなくなった青山の熊野神社の神輿が揃ったのは27～28年の事です。その年はGHQの町会の禁止がとかれ、皇太子の成年式が行われた年です。それまでは熊野神社のお祭りには、近くの乃木神社の神輿を借りていました。

お祭りが近くなると世話好きな大人たちは夜なべをして準備をしてくれたものでした。

成長と共に子どもの山車から神輿へ

昭和21年（1946）生まれの青山のMさんは4歳の時から子どもの山車を引き、それから子ども神輿を担ぐようになり、中学生で大人の神輿を担いだそうです。23年（1948）生まれの赤坂のIさんは、小学校3年ぐらいまでは子どもの山車を引いていました。それから子ども神輿になって、中学2年ぐらいになると大人の神輿を担いだのだそうです。大人の神輿は子どもたちの憧れの的でした。

祭装束

祭装束は、今のような長半纏ではなく白地の短い法被で、下に穿くのも白い半股引（日本の短パン）、腰には（ピンク色などの）細帯を締めました。下町の深川から来た人が「赤坂は山の手だから、祭装束がきれいだ」といっていました。住み込みの店員さんや職人さんの法被の襟にはお店の屋号が藍で染めてありました。昔は、法被はどこの町会でも白が多かったそうです。皆個人で持っていて、今のように町会での貸出しなどはありませんでした。法被とお揃いの浴衣も注文の回覧板が回って来て、男物、大人何枚、子ども何枚と注文して、毎年新しく作っていました。

お祭当日の様子

赤坂では赤坂氷川神社のお祭りは、9月15日と決まっていて、平日でもお祭りは行われていました。赤坂小学校も1時間だけ授業で、宿題をやっていれば、早く帰らせてもらえました。

学校に行っても周りからお囃子の太鼓や笛の音が聞こえて来て、お祭り小僧たちはそわそわして勉強なんか手につきません。学校から飛んで帰ると、子どもたちは錫丈の棒のないものを持って町会をぐるっと回って「皆早く出てこい出てこい」と、急かしていました。皆出て来て神輿を担ぐ真似をしました。子どもは沢山いました。地元の人だけでも境内に入り切らない程の人数が集まりました。

赤坂のお祭りの行列では芸者衆の手古舞が出ました。

一ツ木町会には商店の数も多く、住宅街もあったので、大人の神輿に子どもの山車と子ども神輿の3つとも揃っていて、賑やかに行うことができました。

「当時からお祭りキチガイのような人が何人かいました。神輿同士の喧嘩がよくあって、ぶつかり合って「譲れ」「譲らない」と喧嘩になりました」。赤坂の福吉町にいたSさんは、子ども心に自分の町会が喧嘩に勝つのをわくわくして見ていたそうです。

長袖の絽の着物や町内会揃いの浴衣を着て山車を引くのが精いっぱいで、子どもの神輿など担がせてはもらえない子もいました。神輿を見物していて、担いでいる同級生に声をかけたというので、母親からきつく叱られた女の子もいました。そんな母親たちもお祭りの日は神輿や山車に一日中付いて回ってうきうきしていました。

田町通り（現デイリーヤマザキ前）　昭和28年ころ

赤坂表町一二丁目町会は青山通り拡幅までは大きな神輿を出していました。元赤坂のTさんは小学生のころ、大人の神輿が担ぎたくて仕方がなく、潜り込んで棒にぶら下がっていたら、つまみ出されてしまった思い出があります。2年後の表祭りでは中学生になるので堂々と担ぐつもりで楽しみに待っていたら、青山通りの拡幅で担ぎ手となる住民が減り、神輿が出せなくなってとても残念な思いをしたそうです。そのころには、お祭りも下火になっていました。

夜の宵宮は提灯に灯された明かりがとても綺麗でした。

夕方からは盆踊り。今の赤坂会館の所が空き地で、盆踊りをしていました。露店も沢山出るようになり、商家の子どもたちは縁日同様に、一生懸命お手伝いをして貯めたお小遣いを持って、あんこ玉や梅羊羹や酸っぱいお菓子を買って食べました。金魚すくいや、綿飴、針金細工、ボール当て、ブロマイドの販売などがありました。

金王八幡宮のお祭りは秋分の日でした。神輿を担ぐと果物を食べられるのも子どもたちの楽しみの一つでした。熊野神社のお祭りは、9月の21日・22日と決まっていましたので、青山小学校では、お祭りの日は、1時間で終わり、帰らせてくれていました。

コンビーフの缶から作られた神輿

戦争直後の焼け野原でほとんどまだ何もない中、赤坂では町内のブリキ屋さんが、アメリカのコンビーフの空き缶を綺麗にして、神輿を作ってくれました。昭和22年（1947）のお祭は大雨の台風で雨に打たれながら、狂ったように激しく、神輿が担がれていたそうです。21年（1946）に赤坂に引っ越して来たHさんは、嵐の中、神輿が出ている事にとても驚いて、人々の熱気が不気味にも荘厳にも見えたそうです。昔は天候や曜日に関係なく、雨が降ろうが槍が降ろうが行われていました。その後、コンビーフの缶から作られた神輿は、同じように戦争で焼けてしまって神輿のなかった四谷の方から欲しいといわれて、新しい神輿を作った時に譲られました。新しい神輿は浅草の宮本卯之助商店で当時15万円で作られました。

青山の金王八幡宮の神輿や山車も、戦争で全部焼けてなくなってしまったのですが、お祭りが近づくと大人たちが夜遅くまでブリキを切って飾りにし、木を寄せ集めて子ども神輿を作ったんだそうです。大人も子どもも一緒になってお祭りを楽しんだ時代でした。

焼失した赤坂・青山の戦後復興の軌跡を辿る

「溜池のちょうど角、あの辺りが全部焼けたんです」と溜池に住むKさん。赤坂・青山は昭和20年（1945）5月25日の大空襲でほぼ全域にわたって焼失しました。人びとは被害の大きさにも関わらず、茫然としつつも、明日の生活を開始しました。焼け跡から焼け残った木材やトタンを探し、バラックを建て、空地には野菜を植えて食糧を確保し、新たな一歩を踏み出しました。東京オリンピックのころまでの赤坂・青山の移り変わりを当時を知っているみなさんにお聞きしました。

赤坂の人びとと街の暮らし

「青山通りの向こう側（伝馬町）は火がいっぱい。赤坂見附には焼夷弾がぼこぼこ落ちて、弁慶堀に入って助かった。弁慶橋の擬宝珠のついた柱が燃えていたのでそれで暖をとった。みんな赤坂見附駅の出入口に折り重なって、亡くなっていた」と履物屋のOさん。終戦直後はバラックでしたが、昭和21年～22年ころ港信金が融資して1万円（この頃の大卒初任給は3000円）住宅というのが流行り、本建築の家を建てました。このころから「住宅がちらほら建ち始めた」といいます。しかし、水と電気はあったものの、ガスはまだなく薪で煮炊きをしていました。当時伝馬町に住んでいたSさんは「焼け跡の空き地は方々にあり、風呂屋の焼け跡には土管やタイルが残っていて、バラックのような家も建ち並び、商店や鉄工所なども商売を始め、路地も健在で調味料やお金の貸し借りもするような下町の風情もありました」と話します。

すっかり焼野原となってしまった赤坂見附　昭和20年（1945）

ポツポツと赤坂復興の兆しが……

昭和25年ころになると朝鮮戦争の特需もあり、木造2階建ての家が増えてきました。赤坂の花柳界はすでに復興を遂げ、賑わいを取り戻していました。商店街もいち早く営業を始めていましたが、品揃えが難しく、本格的な営業といえるものではありませんでした。街並みは本格的な家が建ち始めたとはいえ、全てが木造2階建て。「赤坂からは東京タワーや国会議事堂、隅田川の花火なども見え、見晴らしの良い風景だった」と多くの方が話しています。現在のTBSのところは小さな山になっていて、戦前は近衛歩兵第三連隊がありました。戦後すぐには戦争の被災者や引揚者のための2階建て長屋住宅が4棟建ち、1棟に50世帯が住み、鶏や山羊も飼っていたそうです。このころ一ツ木通りではまだ馬車や馬が通り、「馬の糞を踏んづけることもたびたびでした」とは一ツ木通りに住んでいたTさんのお話。

赤坂全体の本格的な復興は昭和27年～28年ころから

27年（1952）には近衛歩兵第三連隊の跡地にラジオ東京（現TBS）が移転してくることが決定し、30年（1955）にはテレビスタジオと高さ174メートルのテレビ塔ができて、テレビ放送が開始されました。芸能人などがテレビ局に集まるようになり、赤坂の雰囲気が変わり始めたといいます。戦前から有名だった赤坂一ツ木通りの縁日もこのころになると賑やかになり、多くの人を集めていました。商店街もやっと復活し、一ツ木には共商会といった組織も生まれました。花柳界は朝鮮戦争以降ますます隆盛を極める一方で、15坪以上の建物は許可が下りなかったので、建て増しをくり返して営業をする日々でした。花柳界の隆盛は赤坂の商売の大きな弾みになり、呉服屋、畳屋、履物屋、足袋屋、和菓子屋、美容院、洗い張り屋、車屋、八百屋、魚屋など多くの関連業種が集まりました。

東京オリンピックで大きく姿を変えた表町1、2丁目（現元赤坂）

昭和39年（1964）の東京オリンピックは国家的事業として半ば強引に事業が進められました。メイン会場である神宮外苑への道路の拡幅のため、赤坂地域では最も古くから商業の街として栄えた赤坂表町1、2丁目、東宮御所側が高速道路の建設や青山通りの拡幅のため削られました。かなりの家屋が立ち退き、人口が激減したので、Tさんは「楽しみにしていた神輿が出せなくなった」と口惜しそうに話します。「表町1、2丁目はもうなくなってしまいそうでした」とはかつての住人Sさん。この時、元赤坂は大きく姿を変えることになったのです。

青山通り拡幅工事の様子

夜を彩った赤坂の花柳街と外堀通り

朝鮮戦争に続く、昭和27年（1952）の講和条約の発効で日本の復興が本格的に進むことになりました。料亭街や外堀通りに集まった大型ナイトクラブやキャバレーなどは永田町が近いため、政界の「待合政治」や企業の接待、TBSなどに集う芸能人・文化人などで大変賑わいました。料亭街は高い黒塀が続き、立派な構えの門に灯るほのかな灯りが、清め水が打たれた街路を照らしていました。夜ともなると、静謐な街に運転手付きの黒塗りの外車が列をなし、客層の高さを誇示しているかのようでした。田町通り、外堀通りにあった、キャバレーやナイトクラブ、カフェなどはきらびやかで、豪華な装飾を誇り「リトルアメリカだった」とHさん。一見して、一般の方お断りの感じが強く、赤坂の人は「あまり近づかなかった」といいます。この華やかさは戦後の赤坂の一つの顔といえるでしょう。

昭和39年にできたゴールデン月世界の玄関（提供：月世界ビル）

青山の街の原風景

戦前は、赤坂見附から青山通りを登り、右手の赤坂御用地と左手の学校の広さ程もある大邸宅が並ぶ赤坂表町、新坂町を抜け、青山の町に入りました。青山の道は青山通りを背骨とすると、外苑東通り、青山墓地通り、スタジアム通り、表参道、高樹町通り（骨董通り）が、肋骨をかたち作っていました。これらの道路のあいだに、明治神宮外苑と青山霊園の大規模な緑地があり、第一師団司令部、陸軍大学校などの軍施設と、女子学習院、青山師範学校の文教施設が散在するほかは住宅地でした。

青山通り（電車通りと云った）のような主要道路や長者丸通りといった横丁には、八百屋、魚屋、酒屋に豆腐屋、クリーニング屋、煙草屋、風呂屋など個人商店が並び、日常生活の必需品をほとんど扱っていました。1階が店、2階は住居が一般的な造りです。商店街の裏は普通の勤め人が住むしもた屋で、路地には子どもたちの遊び声が響く、

下町的雰囲気がありました。南青山ではしもた屋が立て込むあたりを少し離れると1戸が100坪、200坪もあるお屋敷町で、特に青南小学校周辺（南青山6丁目付近）には多くの大邸宅が集っていて小学校より大きいお屋敷もありました。今の根津美術館もそのひとつです。お屋敷町にはうっそうとした樹木が茂り、道に子どもたちの声はなく、ただ店の御用聞きや新聞配達を見かけるぐらいの閑静な環境でした。

店の御用聞きや新聞配達を見かけるくらいの閑静なお屋敷町

戦争が激しくなると、生活物資の配給制や商店の営業への統制によって、街の生活活動は沈滞してしまいました。火除地を作るため、昭和19年（1944）に区域を指定して住宅をこわす「建物の強制疎開」によって空地ができました。小学校児童が集団疎開して空いた校舎に兵隊さんが駐留していました。殺伐とした、敗戦色が強くなっている中での20年（1945）5月25日の山手大空襲でした。

焼け跡からの復興

山手大空襲で、青山には青山小学校、梅窓院、青山警察署、安田銀行（現みずほ銀行）、同潤会青山アパート、青山会館などの鉄筋コンクリート建物のほかは、数箇所の町屋の区画が奇跡的に焼失を免れただけでした。青山墓地などに避難し、戻った人達は防空壕から生活用品を掘り起こし、あたりから食器やトタンを拾うなどしてなんとか生活を始めると間もなく8月15日の終戦になりました。

焼け跡には例外的に木造住宅を新築や移築した人もいましたが、多くの人は焼トタンと不要の防空壕や旧兵舎などから古材を集めてバラックを建てました。終戦直後は空前の食料不足で、周りの空地を手当たり次第畑にしていたので、まるで郊外の新興地のようでした。2～3年もするとちりぢりに疎開した人や焼け残り住宅に間借りしていた人も戻ってきて街の形ができてきました。当時の青山は土地の買い手もなく、家を建てるのに土地代より建築費の方が高かったと、Aさんの母親が言っていたそうです。大邸宅の人たちは別荘に疎開し、戻ることなく空き地のままで、子どもたちの遊び場になっていました。

また、第一師団司令部、陸軍大学校、旧青山斎場、青山師範学校跡に都営住宅が急造されて戦災者と外地からの引揚者の人たちが住むと、公営団地の新しい雰囲気が青山に加わることになりました。

昭和25年（1950）6月に朝鮮動乱が勃発。その特需によって人々の生活が改善されてきました。道路沿いに平屋のバラック建てで個人の商店が生活用品を扱っていましたが、新しく道路をコの字形に切り込んだ小さなマーケット（商店の木造棟割長屋）が街のところどころにできたのです。

青山1丁目交差点南側のマーケットはこの様な形態で、食べ物屋、本屋、パチンコ屋などに、一杯飲み屋まであり、庶民的な風情でした。

東京オリンピックに向けての街づくり

昭和30年代に入ると、日本の経済は完全に復興したとして「もはや戦後ではない」が流行語になりました。街には所どころ焼け跡があり、仮設の建物が残ってはいるものの、主な道路の沿道は、木造2階建ての日用品を扱う個人商店が、戦災前のように建ち並びました。

お屋敷町では、大邸宅が分譲されたり大企業や公的機関の社宅、公舎、寮にと変わったりしましたが、あいも変わらず御用聞商法は続き、しもた屋の生活も下町風に戻ってきました。

34年（1959）5月に東京が第18回オリンピックの開催地に決定されると、39年（1964）の開催を目指して、競技施設、選手村、道路の整備が急ピッチで始まりました。青山地区内は青山通り、外苑東通りの拡幅や外苑西通りの新設などの大規模道路工事が集中しましたが、大きな支障もなく進んだようです。新聞に「青山通りの青山1丁目から6丁目まで約1.8キロの拡幅工事で、収用された面積は3.3ヘクタール、土地単価は坪当り約40万円、営業補償などを含めると50～60億円が地元に支払われた」と書かれています。

青山通りを幅22メートルから40メートルに広げるため、青山1丁目付近で北側に、青山2丁目から6丁目は南北両側の用地が買収されました。対象の地権者たちは、新たな商売にあたって自己の独立した店舗を持つことに執着があり、なかなか共同ビル建設までには踏込めずに、個々に鉄筋コンクリート3～4階建てのビルを建てるのが普通でした。

このような動きの中で南青山3丁目交差点付近の地権者と日本住宅公団が4棟の高層共同ビルを建設し、38年（1963）に完成させました。10階以上の高層ビルが4棟も集中して出現したことは、拡幅された青山通り沿いの景観を一変させるできごとでした。

第一青山ビルの例では、北青山3丁目で氷屋、金物屋、酒屋、漬物屋、医院などの地権者へ、日本住宅公団から、公団住宅と一体で商店、事務所を建設し、商店と事務所は地権者に譲り渡す方式で再開発ビル（立体換地ゲタバキ住宅）を建てないかとの提案を受けて、同意し事業に着手しました。

途中で一部地権者の事業からの撤退や、仮店舗で営業するなどの苦労がありましたが、38年（1963）6月には、地下1階から地上3階までは地権者所有の店舗と事務所、4階から11階は、250戸の公団賃貸住宅のビルが完成しました。現在6人の地権者は持ち分に応じて安定した収入を得ています。地権者の1人Uさんは「当時安易に土地を売り渡さずに苦労した甲斐があった」と語っています。

しかし、これらの街の変貌は当面表通りにとどまり、背後の住宅区域には及びませんでした。

このことから50年代に入ると主要な道路に沿って大規模な再開発事業が始まり、街並が大変貌していくことになります。

赤坂・青山の庶民の足

都電は、戦後都民の足として急速に路線網を拡大し、最盛期の昭和37年（1962）には41系統、総延長距離213㎞にも及びました。当時赤坂・青山地区には3番（飯田橋↔品川）、9番（渋谷↔浜町）、10番（渋谷↔須田町）、7番（品川↔四谷3丁目）、6番（新橋↔渋谷）、そして33番（四谷3丁目↔浜松町）の6系統が幹線道路を走っていました。

青山御所南門　昭和36年（1961）出展：みなと写真散歩

30年代の半ばごろまで、都電は間違いなく交通の主役でした。道路の中央の専用軌道を堂々と走り、数少なかった自動車は両側の道をおとなしく走っていました（写真参照）。しかし30年代末から自動車の数が爆発的に増えて専用軌道に入り込むようになり、都電は時刻表通りの運行が困難になりました。いつしか都電は「時代遅れの乗り物、交通渋滞の元凶」と呼ばれるようになり、昭和40年代初めに次々と姿を消していきます。青山通りがオリンピックを契機にほぼ2倍に拡張され、そして42年（1967）秋に都電が廃止になったことで、街の様相が一変したことは多くの人が指摘しています。

しかし、「都電はその独特のフォルム、重量感あふれる走り、警報音、さっそうとした車掌の姿など、長年親しんできた住民にとっては、単なる乗り物以上の懐かしい存在だ」とKさんはいっています。

和の極み 赤坂花街・洋の華 グランドキャバレー

戦後間もなく花柳界の人々は焼け跡から立ち上がり格式ある花街の伝統を復活させました。永田町・霞が関と隣り合う赤坂の料亭は、経済成長につれ、政官財の要人の奥座敷として、かつてない隆盛を極めます。東京オリンピックが間近くなると、国際色豊かな社交場として高級ナイトクラブ・グランドキャバレーが登場し、花柳界と共存共栄。静かな住宅地赤坂のなかで、中通り（現みすじ通り）・田町通り・外堀通りは和洋の最高のおもてなしを供する別世界となり、街の経済の中心となったのです。そのころを知る方々にお話を伺いました。

戦後の赤坂と「花柳界」の復興

空襲によって東京は焦土と化し、街も人々の心も荒廃してしまいましたが、昭和20年（1945）、終戦の日から約2カ月後、10月25日には警視庁が「三業地」の営業再開を許可するなど、東京の「花柳界」復興は思ったより早く進み、赤坂も例外ではありませんでした。

戦時中は、見番が工場になり、芸妓も挺身隊として、もんぺ姿で仕事をしていましたが、戦争が終結すると、すぐに「赤坂復興組合」が組織されて、疎開していた芸妓は呼び寄せられ、赤坂の花柳界を復興しようという動きがみられます。ほどなく花柳界は元通りに営業しますが、25年（1950）6月に朝鮮戦争が勃発すると特需景気が始まり、赤坂の花柳界は大いに繁盛するようになります。客層は政財界人が中心で特に政治家は、永田町が近いため、毎晩のように来ていました。財界の接待のほか、政界では「政策を進める上での交渉の場」として用いられましたが、芸妓や料亭で働く人の「口がかたい」ことが重宝された理由の一つのようです。

30年代の全盛期には、料亭は60軒を超え、芸妓の数も400人以上が登録されていました。当時の赤坂・田町通りのお正月風景に、「獅子舞い」や「三河漫才」が来たり「鳶のはしご乗り」が見られたりと、大変な賑わいだったようです。

戦後は戦前より「一層派手になった」といわれるほどでした。

花柳界を支えて来た商売

ほぼ花柳界でしか見られない商売のひとつである、人力車を擁し差配する車屋は、赤坂では二丁目交番付近（旧福吉町）に「大新」という業者が芸妓の送り迎えで繁盛していました。その後、人力車は姿を消し、今では当時の風情を感じることはできなくなりましたが、かつて赤坂の芸妓は、たとえ50mほどの距離であっても必ず人力車を呼び、芸妓姿で歩くのは沽券に関わるとのプライドがあったようです。最近人力車は浅草などの観光地で復活しています。

料亭での芸妓のみなさんとの様子

福吉町（現赤坂2丁目） 昭和39年（1964）

また、「呉服屋」「履物屋」「足袋屋」「櫛やかんざし、化粧道具を扱う小間物屋」といった店も、花柳界とは切っても切れない業種です。芸妓は見栄が大事で「着物が良くないとお座敷に呼ばれない」ともいわれ「呉服屋に奉公しているようなもの」といわれるほどでした。ただ、呉服屋や履物屋、足袋屋、小間物屋なども時代とともに街から少しずつ消えていき、現在では、数軒がかろうじて残っている程度です。

そのほか「和菓子屋」「甘味処」「美容院」「布団屋」「畳屋」「障子屋」「植木屋」といった業種は、花柳界に限られる訳ではありませんが、赤坂では花街の隆盛とともに繁盛してきました。布団屋は、夏場を過ぎると座布団を預かり、打ち直して翌年届ける、という商売が成り立っていました。畳屋も「昔の料亭は毎年最上級の畳に替えていた」といわれ、『中川』などの有名な料亭では出入りの植木屋が、毎日庭木の手入れをしていました。また「八百屋」「魚屋」「肉屋」「酒屋」では、毎日「御用聞き」をして、その日のうちに注文の品を納めていました。

赤坂2丁目（旧福吉町） 平成26年（2014）

昼には三味線の音色や小唄の稽古が聞こえ、赤坂は「子ども心にも風情ある街」でした。

「夜の街・赤坂」の全盛時代

日本経済は、昭和29年（1954）12月から始まる神武景気以降、高度成長を歩み始めますが、それとともに赤坂の料亭街も、永田町の奥座敷として日本政治を舞台裏から支えている一面がありました。加えて、昭和30年代中頃になると、ナイトクラブやグランドキャバレーと呼ばれる、最高のショーと食事が楽しめる業態が登場し、名実ともに赤坂は「夜の街」として一世を風靡するようになります。30年代から40年代にかけて、赤坂の夜は全盛時代を迎えていました。

昭和30年（1955）にTBS（当時ラジオ東京）が、赤坂5丁目（当時赤坂一ツ木町）でテレビの本放送を開始しましたが、36年（1961）に社屋の完成とともに、有楽町から本社が移転すると、赤坂の夜の彩りに拍車がかかります。地元の人も「やっぱりTBSが来てから赤坂が賑やかになった」と語りますが、当時は街に華やぎがあり、芸妓さんや女優さんなど、綺麗な女性が多く行き

交っていたのが夜の赤坂の雰囲気でありました。

また、最盛期の赤坂の芸妓約300人による歌舞伎座での『赤坂をどり』6日間の連続公演は、花街の「誇り」でもありました。「穂寿美」や「有職」の寿司が差し入れられ、組合からあまり派手にしないようお達しがあるほど盛況を見せていた時代があったのです。

昭和31年（1956）の火災で焼失したナイトクラブ「ラテンクォーター」の跡地（現プルデンシャルタワー）に、国際的な社交場として34年（1959）12月「ニューラテンクォーター」が開業しました。ここではルイ・アームストロングやサミー・デイヴィスJrなど、本場でもなかなか見ることができない超一流の歌手による本格的なショーを楽しむことができました。660坪の店内に300卓のテーブルが配置され、200人を超える従業員が勤務したと聞いています。皇族、政財界の大物から、勝新太郎や石原裕次郎ら有名芸能人、ヤクザの幹部に至るまでバラエティに富んだ客層を持つ同店は、赤坂の夜を一変させたといわれました。そのほかにも「コパカバーナ」東洋一の規模といわれた「ミカド」「ゴールデン月世界」など、赤坂はエンターテインメントの中心地となり、料亭で食事後の客や、銀座から流れてくる客が集まり、毎晩明け方まで華やかに盛り上がっていました。

戦後直後の赤坂名妓の舞

一方、当時について地元の住宅地の人は、「ミカドの店の前は夜通ったこともない」などと語り、これらの施設とは若干距離があったようにも見受けられます。一方、商店街の人は「日本の原動力になって、凄いパワーだった」、「第一線の政治家や財界人、官僚、芸能人が多かった」と、当時の赤坂が持っていた、様々な分野の一流の人を引き寄せる力を誇らしげに語ります。

花柳界

花柳界とは、伝統的な和食の艶やかな料理による味覚、美しく着飾った芸妓の歌舞や調度品による視覚、料亭の焚くお香や芸妓の白粉による嗅覚、三味線や長唄による聴覚、肌触りのよい畳や食器から受ける触覚など、日本文化を五感すべてから感じることのできる総合芸術の世界である。かつては東京に46ヶ所あったが、現在「六花街」となり、赤坂では一時60店以上あったといわれる料亭も近年（平成26年）は6店を残すのみとなっている。

三業地

「料亭」、「待合（茶屋）」、「（芸妓）置屋」の三業種の営業が許可されている地域のこと。

見番

料亭（芸妓を呼ぶことを許可された日本料理店）と置屋（芸妓を抱える芸能プロダクションのような機能で、寮の役割も兼ねている）の間を取り持つ業種で、花柳界の組合事務所のような役割をする。通常料亭では、見番を通して芸妓を座敷に呼ぶ。

赤坂をどり

赤坂芸妓衆の芸を発表する場として、昭和24年（1949）に初めて三越劇場で開催され、その後歌舞伎座に場を移し、最盛期には6日間連続で公演を果たすなど、地元の名物的イベントでもあった。平成9年（1997）から休止していたが、18年（2006）に復活し、最近は赤坂ACTシアターで開催されている。

軍用地の転用

江戸の街の骨格がそのまま赤坂・青山になった

かつて江戸時代の赤坂・青山には大名家や幕臣の屋敷が広がり、それらは、明治時代になって軍用地、公共施設、陸軍大学校、政府高官、華族の屋敷などに転用されていきました。その中でも、広大な屋敷跡に軍隊の施設が集中していたため、赤坂・青山は第2次世界大戦ではことのほか激しい空襲の被害に遭い、区域のほとんどを焼失することになりました。その軍用地の戦後転用こそが赤坂・青山の現在の骨格を作り、皮肉にも市街地再開発や公共施設の配置、緑化の推進につながったといっても過言ではないでしょう。

長州藩毛利家下屋敷～歩兵第一連隊～接収（ハーディ・バラックス）～防衛庁～東京ミッドタウン・赤坂中学校（赤坂9丁目）

長州藩邸跡地にできた歩兵第一連隊は昭和20年（1945）の終戦により、連合軍に接収され、カマボコ型の兵舎が作られました。ここはハーディ・バラックスと呼ばれ地元の人は兵舎を建て替えるとき、廃材をバラックの材料とするために、檜町の門に朝早くから並びました。女ながらこの列に並んだKさんによると「いつもMP（ミリタリーポリス）が一番前に並ばせてくれました。男の人は大工道具を持って来てドアを持って帰り、その後は余った薪を拾いその薪でご飯を炊いていました。その頃、すべてMPが仕切っていて、権限がすごかった」そうです。29年（1954）には赤坂中学校が設けられ、35年（1960）に接収解除になると、防衛庁も移転してきました。40年（1965）には長州藩邸にあった池を中心にした庭園が一般に開放され、赤坂の人びとの憩いの場となりました。

広島藩浅野家下屋敷～近衛歩兵第三連隊～都営住宅～ラジオ東京（現TBS）（赤坂5丁目）

近衛歩兵第三連隊の赤いレンガ3階建ての営舎もレンガの壁を残して焼失しました。隣に住む円通寺のご住職は「ここで亡くなられた方の多くを寺で供養した」といいます。ここには戦後すぐ、戦争の被災者や引揚者のための住宅として、2階建ての木造住宅が4棟建てられました。昭和30年初頭まで、人びとはここで暮らし、地元の子どもたちは「山の上」と呼び遊び場としていました。「近衛歩兵第三連隊跡を探索すると、地下室に射撃練習場があり、薬莢が落ちていた。回収する業者に、拾って持っていくとお小遣いになった」とSさんは言います。30年（1955）にはラジオ東京（現TBS）が、内幸町から移転してきて、本格的なテレビ放送を開始しました。テレビ放送のためのテレビ塔がだんだんと高く伸びていくのを「小さいころから不思議な気持ちで見上げていました」と近隣に住むSさん。その後、TBSの敷地として利用されるようになりました。

昭和28年ころの近衛歩兵第三連隊跡（現TBS社屋用地）（提供：TBS）

宇和島藩伊達家上屋敷～歩兵第三連隊～接収（ハーディ・バラックス）～東京大学生産技術研究所～国立新美術館・政策研究大学院大学（六本木7丁目）

兵舎は昭和3年（1928）に鉄筋コンクリート造りに建て替えられ、陸軍で初めてエレベーター、水洗トイレ、スチーム暖房を備えた画期的な建物でした。平成13年（2001）の生産技術研究所移転まで使われたのち、取り壊されました。外壁の一部が瀟洒なつくりの国立新美術館の前庭にわずかに残されています。

「今の雰囲気からは戦時中に青山霊園の中で汗みずくで機関銃の操作や、駆け足で通信線を伏設する訓練をしたり、隊列を組んで営門に入る兵隊さんを想像できないよ」と長らく近くに住んでいるIさんはいいます。

なお、未返還の土地に今も米軍宿舎、ヘリポート、星条旗新聞社があります。

郡上藩青山家下屋敷～第一師団司令部・陸軍省青山射的場～都営住宅（南青山1丁目）

第一師団司令部は歩兵第一、第三、第四十九（甲府）、第五十七（佐倉）連隊を統括する組織で明治24年（1891）に当地に移設されました。既に隣接して周囲をコの字型の土手で囲んだ青山射的場があって、家が立て込んでくると流弾が1000メートル以上遠くの日本赤十字病院（広尾）にまでたびたび飛来することで問題になったことがありました。一方でここは「鉄砲山」と呼ばれ、地域を問わず子どもたちにとっては土手すべり、バッタ取り、水溜りでトンボやゲンゴロウ取りなど絶好の遊び場でもありました。

戦後これらの軍用地跡には戦災者や外地からの引揚者向けに都営住宅が建てられました。のちに木造の都営住宅は取り壊されて公園や個人住宅などに変わり、新しい街に変わっていきました。

昭和22年ころまでのことか、司令部跡地に太い水道管のバルブを勝手に開いて滔々と水を出せる防火貯水池があって、子どもたちにとっては素晴らしいプールでした。

篠山藩青山家中屋敷～陸軍大学校～接収～港区立青山中学校（北青山1丁目）

陸軍大学校が終戦で廃校になり、鉄筋コンクリート校舎部分が焼け残って接収され、返還後の昭和30年（1955）から青山中学校の校舎に転用されました。なお、その他の部分にはすでに25年（1950）に鉄筋コンクリート造4階建2DKの都営住宅が建てられていました。

山形藩水野家下屋敷～近衛歩兵第四連隊～都立青山高等学校・国学院高等学校・都営住宅など（渋谷区神宮前4丁目・新宿区霞岳町）

神宮球場と向かい合った連隊の施設は全体が焼け残っていて、戦後、鉄筋コンクリートの兵舎は青山及び国学院高等学校の校舎に、木造の兵舎、将校集会所、馬屋は都営住宅に転用されました。終戦直後、ガキ大将に引率されたIさんたちは、空の兵舎に潜り込んで放置されていた背嚢や銃剣道の防具を持ち出したり、山積みされた鉄兜を貯水池に浮かべて遊んだそうです。また昭和30年代始めまで残っていた池はザリガニの釣り場になっていました。

代々木村などの畑地・岸和田藩岡部家などの武家地～代々木練兵場～接収（ワシントンハイツ）～東京オリンピック選手村～代々木公園（渋谷区代々木神園町）

陸軍は明治42年（1908）に農地を買収するなどして練兵場を新設しました。練兵場は裸地や草地だったので、周辺の住民は砂埃で大いに悩まされましたが、特に男の子にとっては大人気の場所で塹壕なども利用してどろんこになり、日暮れまで遊びました。戦後すぐに接収され、ワシントンハイツと呼ばれました。約800戸の米軍将校の家族用宿舎群ができると、ここがアメリカ文化の発信地になりました。昭和39年（1964）の東京オリンピックのために返還を受け、選手村・国立代々木競技場、NHK放送センターになりました。選手の宿舎には米軍の既設宿舎を転用しましたが、後に取り壊されて代々木公園になっています。

外国文化

いち早くアメリカ文化がやって来た

敗戦で打ちのめされていた日本にやって来た駐留軍の兵士たち。まだ、西洋人など珍しかった時代、彼らの生活の場近くにあった赤坂・青山は、否応なく彼らの生活を見、感じ、取り入れていくことになりました。今まで見たことのないような電化製品、娯楽施設、車、生活スタイルすべてが憧れとなり、毎日の生活の中で知らず知らずのうちに、影響を受けていったといってもいいでしょう。それほど身近に外国文化がやってきたのでした。

占領時代がもたらしたもの

昭和20年（1945）、焼け野原になった赤坂周辺にはたくさんのアメリカ兵のための施設ができました。今まで旧日本軍が使用していた広大な土地や屋敷跡はGHQ（連合国軍総司令部）に接収されました。赤坂周辺には陸軍歩兵第一連隊跡地のアメリカ軍将校宿舎ハーディ・バラックス（現ミッドタウン）、閑院宮邸跡のジェファーソンハイツ（現衆議院議長公邸）、陸軍参謀本部跡の霞が関リンカーンセンター（現国土交通省）、陸軍歩兵第三連隊跡の六本木ハーディ・バラックス（現国立新美術館周辺）、代々木練兵場跡のワシントンハイツ（現代々木公園周辺）、山王ホテルは将校のためのホテル（現山王パークタワー）と多くの、そして広大なアメリカ軍のキャンプができました。そこでは将校とその家族が暮らし、金網で仕切られたエリアは「アメリカの生活そのものだった」そうです。ある人は金網の外から覗いた光景を「広い庭にアメリカの車があり、ガソリンスタンド、スーパーマーケット、映画館、スケートリンク、劇場と何でも揃っていた」と証言しています。また、ほかの人は「戦後すぐ、電気洗濯機、電気掃除機、電子レンジ、大型の電気冷蔵庫があり、すすんだ電化生活に驚きました」と語ります。そして、その生活スタイルはそのまま日本人のアメリカへの憧れとなっていきました。当時赤坂中学校の生徒だった女性は「アメリカに帰る将校の家族が、学校に洗濯機を寄付してくれました。丸い機械の真ん中に心棒があるようなものでした。珍しかったので、学校中のカーテンを洗って鉄棒に干した」そうです。そして、「その時、電気洗濯機を初めて見た」といいます。

外国人に抱かれる日本人の赤ちゃん

赤坂の自動車街はもちろん外車ばかり

赤坂は溜池から赤坂見附にかけて、第2次世界大戦以前から自動車のディーラーや修理工場、部品屋など自動車関連の会社やお店が並び、自動車街を形成していました。国産の自動車などない時代です。戦後の占領下では日本で自動車の製作も輸入も自由にはなりませんでした。戦後の自動車は外貨不足の状況から政府の許可を得て輸入したものか、アメリカ軍人たちの中古を整備、組み立て直して日本人が使用するものでした。赤坂の自動車街の人たちは本領を発揮し、アメリカ軍人の中古の車を修理し、車を欲しいという人たちに販売しました。車はとても高価で、財界人や芸能人などのお金持ちのものでした。当時自動車の販

売をしていた人でさえ「車は売るもの。自分たちが乗るものとは考えていなかった」そうです。そして「車の持てる時代が来るとは考えてもみなかった」といっています。だから、多くの人は、カタログや外堀通りに並ぶショールームを見て楽しんでいました。ショールームに並ぶ車はクライスラー、ビュイック、フォード、オースチン、ダッチ、ヒルマン、キャデラック、ロールスロイスなど、当時の有名な外車ばかり。赤坂で働いていた青年はショールームを見るのが楽しみで「配達に出たきり、なかなか帰って来なかった」とお店の人を困らせました。「自動車は高額で売れたので、仲介をする人たちの利益も大きかったのではないでしょうか」とは、当時の自動車街を知る床屋さん。そのころの自動車街の繁栄を語ります。

ホテルの建設ラッシュと東京オリンピック

昭和25年（1950）の朝鮮戦争特需と27年（1952）のサンフランシスコ講和条約の発効で、日本の経済は少し落ち着き、本格的な戦後復興が始まりました。経済活動が活発になると、仕事の受注や発注を巡る接待営業も活発になり、赤坂はその舞台となりました。復興の大きな起爆剤になった東京オリンピックの誘致も外堀通りを大きく変えました。外堀通り沿いには、外国人や日本人の接待の場として豪華なクラブやキャバレー、パリを模した洒落たカフェテラスが軒を連ねました。また、外国人の宿泊のための西洋式ホテル（赤坂プリンスホテル、ニュージャパン、ニューオータニ、オークラ、東京ヒルトンホテルなど）が次々と建設されていきました。外国人だけではなく日本の政財界人も集まり、外車が連なって、ある人は「当時の外堀通りは日本ではないようだった」と表現しています。しかし、外堀通りの華やかさと比べ、内側の住宅に暮らす人びとにとってはやっと復興が始まったところでした。

ある少女にとって「外国 イコール アメリカ」でした

戦後の日本にとって、アメリカの進駐軍の影響は計り知れないものでした。アメリカのものは、文化も品物もすべて「いいもの」というのは、周りの大人から少女が教えられたこと。アメリカの真似をして、アメリカの物を買い、大人も子どももアメリカに憧れ、影響されました。

少女が夢中になったバービー人形は、アメリカそのものでした。ファッションだけでなく、人形の家具や食器等はアメリカの生活を想像させました。日本ではめずらしい耐熱ガラスのパイロセラムの鍋もバービー人形の調度品の中にありました。

青山通りはアメリカ文化の影響を受けて変貌していきました。

昭和29年（1954）の紀ノ国屋入口。イギリスパンは人気があった

青山通りに吹いたワシントンハイツの風

戦後、ワシントンハイツと呼ばれる進駐軍将校の宿舎が、現在のNHK、国立代々木競技場、代々木公園の広大な敷地に建てられました。米兵たちは、宿舎から大手町周辺のGHQ本部や関連施設に自動車で青山通りを通って通勤していました。ワシントンハイツから近かったことと、通勤途中に立ち寄れて便利だったため、青山通りは早くからアメリカの影響を受けました。

テーラーや帽子屋は、進駐軍将校やその家族の洋服や帽子を作るようになったので、アメリカの立体裁断などの技術が入ってきました。

外国人が室内装飾や土産に好む日本の伝統工芸品や、骨董品を扱う店も増えました。輸入玩具を売るキディランドができ、外国人だけでなく日本人も外国製品を買いに訪れました。

青山会館が進駐軍に接収され、将校のダンスホール、クラブになったのをきっかけに近所との交流が生まれ、一緒にビールを飲んだり、ハーシーのチョコレートをもらったりしました。青山界隈の子どもは、自分から「ギブミー・チョコレート」とはいわなかったそうです。

青山には「日本で一番初め」がいっぱい

昭和27年（1952）、青山に日本で最初の民間ボウリング場ができました。外国的な雰囲気で親がいないと入れない感じがしましたが、大人も子どもも、楽しめる娯楽でした。はじめはピンボーイがいて、ピンを手で並べていました。

明治43年（1910）から果物商だった紀ノ国屋は、終戦直後、ワシントンハイツに日本人はそれまであまり食べなかった生野菜や新鮮なレタスなどを提供するよう依頼されて清浄野菜食料品店となりました。その後、28年（1953）に日本で初めて、自分で品物を選んで籠に入れレジスターに持っていくスタイルのスーパーマーケットとして営業を開始しました。「いいものや珍しいものを買いたい時は、紀ノ国屋に行けば高かったけれど、たいてい揃ったし、輸入食品やお菓子も充実していたので、外国にいるような気がして見ているだけでも楽しかった」といいます。紀ノ国屋のイギリスパンは人気があり、ほかにもパイ、ドーナツ、ケーキやパンの種類も豊富でした。店の中はもちろん、店の窓ガラスに英語の文字が並び、そこだけ外国のような気分がしました。

昭和39年（1964）、日本で初めて24時間営業のスーパーマーケット「ユアーズ」ができました。入口にはハリウッドのチャイニーズシアターにあるようなスターたちの手形、足形、サインなどが入った石版がならんでいました。深夜営業で周辺から苦情もありましたが、芸能人や外国人の溜まり場になっていました。輸入食料品や輸入雑貨が多く、店内にホットドッグやハンバーガーがその場で食べられるカウンターがあるなど、アメリカンテイストで人気がありました。日本人は「立ち食いはお行儀悪い」と言われていましたが、外国人の真似をして、お店で作りたてのドーナツを買って食べるのが流行りでした。

日本で初めて明治神宮外苑に登場したソフトクリーム

移動遊園地

昭和29年（1954）8月14日から9月26日まで、外苑前軟式野球場で「コニーアイランドショー」が開催されました。これは、アメリカからやってきた移動遊園地で幕を張り巡らして各種の遊具を配置し、午前10時から午後10時まで開催されました。夜は色とりどりのイルミネーションが深緑の樹木の中できらびやかに輝き、たいそう人気でした。30年（1955）と2回開催されました。キャラメルを買ってポイントを貯めると入場券がもらえたそうです。

デパートの屋上や動植物園にある小さな遊園地しか知らない日本人にとっては衝撃的でした。

クリスマス

進駐軍施設の周辺の家庭に米兵がクリスマスプレゼントを配ったりして、アメリカの行事を日本に広めました。同時にアメリカの文化に根付いている「キリスト教」を広めようとしたのかもしれません。キリスト教会や青山学院のようなキリスト教の学校などでは、クリスマスページェント（キリスト生誕劇）を行い、クリスマスを祝いました。

キリスト教に関係ない一般家庭でも家にクリスマスツリーを飾り、クリスマスケーキを買ってパーティをするようになりました。当時は本物のもみの木を使って飾り、終わると庭にそのもみの木を植えた家もありました。教会や外国人の真似をして、キャンドルを持ってクリスマスソングを歌いながら、家の周りを回るキャロリングをしたりする子どももいました。

キャンドルを持ってクリスマスソングを歌う

懐かしい時代を映す、歌やドラマ

終戦直後は食べ物も自給自足でした。配給品だけではまるで足りなくて、それぞれに物物交換をしたり、なけなしの手元のものを持って行ってヤミ市で食料を仕入れていました。中には、とても潔癖で自分の信条からヤミ米はいやだと、山口判事のように餓死を選んだ方もでてきました（昭和22年10月11日逝去）。そういった食うや食わずの生活の中で、みなさんは何を慰めに生きていたのでしょうか。

お話をお伺いしていると、貧しい日々の暮らしの中にあってもちょっとした楽しみを見つけて、それを少しでも味わうことが慰めとなり、そうすることで辛い日々の重荷が少しでも軽くなっていった様子が垣間見えてきました。

ラジオの楽しみ

数少ない電化製品の中では〝ラジオ〟が一番身近にありました。まだトランジスタもないころで真空管ラジオから、また中には自分で組み立てた鉱石ラジオを通して放送局からの肉声が流れてきました。

みなさんが毎日楽しみにしていたものに連続ドラマがありました。

Cさんには、小学生のころに「笛吹童子」を聴いていた思い出がありました。照明も少ない暗い夕暮れの街角や家の中で、♪ヒャラーリ　ヒャラリコ　ヒャリーコ　ヒャラレロ　誰が吹くのか不思議な笛だ…♪という歌詞の「笛吹童子」の調べが耳に入ってきました。今でもその歌詞とメロディーが記憶に残っている方は少なくないでしょう。

Nさんにとって懐かしいラジオドラマは「鐘の鳴る丘」や「おらぁ三太だ！（三太物語）」でした。

また、一世を風靡した「君の名は」は、昭和27年（1952）から2年間電波にのりました。この時間帯には女湯がガラガラになったそうです。

そのお話をHさんから聞くことができました。「子どものころ、この時間になるとおふくろから『おまえお風呂に行きな』っていわれて、行くと中はガラガラなんだよね。『誰もいねえじゃないか』っておふくろにいったけど、どうもその時間には『君の名は』をラジオでやっていたみたい」。

懐かしいドラマや連続物には次のような番組がありました。

昭和20年（1945）「街頭にて」「山から来た男」
昭和21年（1946）「のど自慢素人音楽会」「尋ね人」
昭和22年（1947）「鐘のなる丘」「上方演芸会」
昭和27年（1952）「君の名は」
昭和28年（1953）「笛吹童子」
昭和31年（1956）「少年探偵団」
昭和32年（1957）「一丁目一番地」
…などなど～

また懐かしい歌声も電波にのって流れました。

「リンゴの唄」が一番印象深いかも知れません。「♪赤いリンゴに口びるよせて～♪…　リンゴの気持ちはよ～くわかる～♪（この箇所が特に共感を呼んだのかもしれません）」

でも当時、リンゴは高級品で庶民の口にはなかなか入りませんでした。

♪歌は世につれ、世は歌につれ♪…それぞれの時代にそれぞれの歌が！　後から思うとその歌が時代を反映して、歌を耳にする時に、ふとその時代の空気、雰囲気、懐かしい思い出が次々に思い浮かんでくるようです。

Oさん、Nさん姉妹の思い出の唄は、美空ひばりの「鞍馬天狗」「君の名は」。そしてレコードで聴いた「鐘の鳴る丘」「月の砂漠」。

終戦直後から昭和42年（1967）までの流行歌は次のとおりです。

今、読んでいらっしゃるみなさまもふと過ぎ去りし昔を思い、それぞれの時代をしみじみと懐かしく思い浮かべられることでしょう！

昭和20年（1945）「お山の杉の子」「男散るなら」
昭和21年（1946）「リンゴの唄」「東京の花売り娘」
昭和22年（1947）「東京ブギウギ」「炭坑節」
昭和23年（1948）「湯の町エレジー」「憧れのハワイ航路」
昭和24年（1949）「青い山脈」「銀座カンカン娘」
昭和38年（1963）「東京五輪音頭」「高校三年生」
昭和39年（1964）「柔」「アンコ椿は恋の花」

東京オリンピックでは初めて柔道が正式競技に採用されました。そのこともあいまって、翌昭和40年（1965）にかけて美空ひばりの歌う「柔」が爆発的にヒットしました。発売から半年足らずで180万枚以上を売り上げる大ヒットとなりました。また、42年（1967）には「悲しい酒」がヒットしました。

当時の庶民には高嶺の花だった「リンゴ」

Yさんの青春の思い出は「外国の歌が多かった。ジャズやハワイアンなどのモダンなミュージック。『湯の町エレジー』など。若いころは縁台でギターをかかえて歌っていた。パーティーなんかにも行った」。

赤坂には昭和30年（1955）にTBSが移転してきて情報発信基地として地域に色々な影響を与えていますが、音楽関係の会社や事務所、コロンビア、テイチク、クラウン、三橋美智也の事務所などがありました。床屋を開いていたMさんのところには三橋兄弟が毎日髭剃りに来たそうです。また、力道山、美空ひばり、赤坂小梅、中村メイコ、十朱幸代など多くの有名人が住んでいましたが、地元の人たちはそっと普通に接していたようです。

テレビの楽しみ

昭和30年（1955）から32年（1957）にかけては好景気で、神武景気と呼ばれました。昭和25年（1950）に起きた朝鮮戦争で被害を受けたアメリカ軍の兵器の修理などで潤ったとされています。〝神武景気〟は、第二次世界大戦後疲弊していた経済水準を戦前以上にまで回復しました。

経済白書で「もはや戦後ではない」といわれたのは31年（1956）でした。

家庭電化製品では、白黒テレビが次第に普及してきました。この白黒テレビに洗濯機、冷蔵庫が加わり「三種の神器」と呼ばれ庶民の生活に徐々に広まっていった時代でした。

昭和35年（1960）には、池田勇人内閣の「所得倍増計画」にそって家庭に三種の神器が増えてきました。輝かしいその延長上に、かの東京オリンピックがあって、東京の街並みが変わっていったといわれています。

といってもこの時代、テレビは高級品でまだまだ一般家庭には普及していませんでした。

テレビがあるのは裕福な家庭や商店の一部だけでした。そういった家庭では、近所の人が見に来るのでそのためのスペースを設けたり、また椅子まで置いている家もありました。街頭テレビには多くの人が群がっていました。

Mさんのお話では「青山では、通り沿いで不動産をやっていたAさんが一番早く、昭和30年代前半にはテレビが入り、外から見ることもできた」。

また、Sさんによれば「かつて梅窓院の境内に広場があり、ブランコなどの子どもの遊具もあったが街頭テレビもあった」。

テレビの番組では、迫力のあるプロレスの印象が強いようですね。

Iさんによれば「一番記憶に残ってるのは、例の力道山ですよ。5丁目交番近くの材木店に小学校の同級生がいたんです。そこのおうちが当時、テレビを一番初めに買って、お家にみんなで見に行ったの。力道山、空手チョップをね。いや、あれはやっぱり思い出ですね」。

テレビを前に子どもたちが真剣な面持ちで力道山の空手チョップに見入っていた様子が目に浮かぶようですね。

また、Mさんのお宅は赤坂の電気屋さんだったのですが、力道山が立ち寄ったことがあり、その時に電話を貸してあげたそうです。電話がある奥の方までは一部通路が狭くなっているところがあり、そこを力道山は胴の幅が太すぎてそのままでは通れなかったそうです。その体の大きさ、腰の太さにあらためてびっくりされたという思い出があるそうです。

圧倒的迫力で当時の子どもたちを魅了した「空手チョップ」

その後、白黒テレビが更に一般家庭に普及するのは昭和39年（1964）のオリンピックの前ごろでした（普及率87・8％）。カラーテレビ本放送も35年（1960）9月に開始され、オリンピックがその普及に火をつけたようです。競技場には行けなくてもなんとかお茶の間で間近に競技を見てみたいという強い希望が「この機会にとりあえず月賦にしてでも買いたい！」と多くの人の背中を押したのでしょう。

Iさんの思い出深いテレビ番組は「ジェスチャー」「私の秘密」「お笑い三人組」「日真名氏飛び出す」。

Yさんの思い出は「ララミー牧場」でした（34年（1959）から38年（1963）にかけてアメリカのNBCで放送された西部劇のテレビドラマで、日本では35年（1960）から38年（1963）までNETテレビ系で放送されました）。

Mさんは「小学校時代は『月光仮面』『鉄人28号』『鉄腕アトム』とか。それから、アメリカの『名犬ラッシー』とか、アメリカの他のドラマも。」

それぞれの時代に流行した番組がみなさんの脳裏に記憶されており、それによってみなさんの年代がわかってしまうようです。

けれども、テレビ電波が運ぶのは、楽しい明るい番組、ニュースばかりではありません。昭和38年（1963）11月23日には日米間の初のテレビ衛星中継が放映されましたが、その時には、ケネディ大統領の暗殺が報道され、視聴者を慄然とさせました。翌12月には力道山が亡くなったという悲しい報道もありました。

映画の楽しみ

Sさん、Yさん、Wさんのお三方のお話では、「映画は娯楽、庶民が行けるもの。『東京五人男』は私が戦後最初に見た映画。昭和21年（1946）の正月。喜劇人を集めてるのと、とにかく8月15日に終戦になって翌年の正月にはもう出てるんですから、ほとんどやっつけ仕事だというのはわかる。ただ、その映画はほとんどロケでやっているんです。もういろんな焼け跡がばっちり映ってますから、そういう意味で史料的な価値がある。

赤坂支所の前で都電の場面が出てくるんです。向こうに青山御所らしいあれがあってね、それから、場面によっては奥のほうに赤坂見附の坂が見えている。ピントがブレてるけど見えるんです」と細かいところまで覚えていらっしゃいました。

Kさんは「映画によく行ったのは大学生になってから。ミュージカルや西部劇が特に好きで、洋画をよく見た。ワイズミュラー『ターザン』、ゲイリークーパー『打撃王』、ジェームズ・スチュアート『蘇る熱球』『巴里のアメリカ人』ほか」。

Kさんは、黒澤監督の『酔いどれ天使』、またフランス映画も。渋谷の映画館や新宿名画座によく行かれたそうです。

Yさんの思い出は、外国映画は有楽町で『第三の男』など。

Hさんは「映画はね、記憶に残ってるのは『七人の侍』。あれを兄と見に行ったり、ここから歩いて一の橋によく見に行きました。そこに映画館が3軒ぐらいあったんです。私はよく兄に連れて行ってもらって映画を見ましたね」。

Nさんは「映画は学校の帰りに寄ってよく見ていた。フランス映画、ダニーケイなど。姉の学校では禁止されていた。大学入試の前に左幸子主演の『女中っ子』（昭和30年（1955）公開）というのを見た覚えがある」とのこと。

映画は区民の娯楽で洋画は人気があった

Mさんいわく「東急文化会館の五島プラネタリウムに行ったよ。渋谷パンテオンに先生が連れて行ってくれたこともあった」。

その他の娯楽

社交ダンス

赤坂にお住まいのTさん、Iさんによれば「赤坂にあった『フロリダ』が戦後は新橋と田村町の間、NHKの裏に移り、回数券を買って通った。ジルバが流行っていた。2階が喫茶ギャラリーになっていて、ダンスをしなくてもそこからフロアを眺めて過ごした。音楽はジャズやグレン・ミラー楽団のものなど。銀座や新橋にもダンスホールがあり、赤坂から通った」。

また、昭和22年（1947）9月22日に赤坂小復興のための第1回赤坂小学校同窓会が氷川小学校で開催されました。ダンスパーティー、徳川夢声（赤坂小卒）の漫談、比留間マンドリンクラブ演奏があり、大勢の人が集まったようです。

ジルバが流行していた社交ダンス。ダンスホールには喫茶ギャラリーも

読書の楽しみ

赤坂にも貸し本屋がありました。

Kさんは「戦後の小学生の頃、講談社の月刊誌『少年』、貸本屋で『こぐまのころちゃん』『トラの子とらちゃん』『青鬼赤鬼』や『のらくろ』（田河水泡）などの漫画を借りて読んだ。一番好きだったのは、鉄腕アトム」。

大人の楽しみ

Iさんは「グランドキャバレー『ミカド』に行ったことがある。『ニューラテン・クオーター』にも。『コパカバーナ』には、フランク・シナトラら超一流歌手も出演しており、値段が高かった」といいます。

Hさんいわく「ニューラテンクォーターだと、トイレに入るのが嫌になっちゃうんだよね。チップをとるボーイさんが立っていて、百円玉がなくなっちゃったよ、仕方ないから千円札か、なんて」。

娯楽、楽しみの多い現在と比較するとほとんど何もなかったような時代だったのでしょうが、みなさんそれぞれに楽しみを見つけて人生を豊かにしっかりと生きていかれた時代であったようですね。

東京オリンピックと赤坂・青山

昭和39年（1964）に開催された東京オリンピックは、アジアで初の開催となっただけでなく、アジアやアフリカ諸国による初出場が相次ぎ、史上最多の94ヵ国から、5000人以上の選手が出場しました。競技施設や選手村、羽田空港などオリンピックに関連する施設の間に位置する赤坂・青山地区では、オリンピックを機に、交通環境の整備が進み、住民、暮らし、景観が大きく変化しました。ここでは、オリンピック前後の街や住民の変化を、通りと住民の視線に着目しながら、ふりかえります。

オリンピックの東京開催決定

昭和34年（1959）IOC総会で昭和39年（1964）の第18回オリンピック大会の開催都市が東京に決まりました。東京は、まだ、太平洋戦争からの復興も十分とは言えない状態でしたが、5年後のオリンピック開催に向けて、会場施設やそれらをつなぐ道路、東海道新幹線や東京モノレールが急ピッチで建設されました。

道路や競技施設の建設 ～青山通りがオリンピック道路に

東京都は、選手や観客の各施設への移動をスムーズにするため、「緊急道路整備事業計画」を策定し、オリンピック開催に併せて、おもに、競技施設と選手村、羽田空港を結ぶ22路線を整備しました。

そこで60万平方メートルの宅地が道路用地となり、5200戸、約7000世帯が立ち退きの対象になりました。

赤坂・青山地区のオリンピック関連道路

赤坂・青山地区では、青山通りと外苑西通りと六本木通りが整備されました。オリンピック目前に、急きょ整備された道路は、街の景観や人々の暮らしに、大きな変化をもたらしました。

青山通り

東京オリンピック前、赤坂見附から青山1丁目交差点、表参道交差点にかけて、青山通りは、段階的に拡幅されました。最初の拡幅で、豊川稲荷の隣にあった「虎屋」が、赤坂警察の隣に移りました。赤坂見附から、青山1丁目まではすべて、御所のある北側へ、青山1丁目から先は、両側へ22mから40mへと拡幅されました。

戦後、焼け野原にバラックが建ち、やがて木造2階建が並びました。昭和36～39年の青山通りの拡幅により、通り沿いは、個人事業者が、補償金の範囲内3・4階建に建直したので、景観が変化し始めました。通りに面した商店は、土地が狭くなるので、背後のしもた屋の土地を購入し、新しい建物を建て、しもた屋の住民は、地域を出て行かざるをえなくなりました。道路拡張や建設で多くの家が立ち退きになり、地域の住民が減り、青山通りや六本木通りに学区域のかかる小学校の児童は激減しました。

また、大規模な開発後にやってくる新たな住民や労働者によって、昔ながらの青山の街の雰囲気は次第に失われ、道路拡幅で北青山と南青山の距離も広がってしまいました。拡幅前は手を振れば道路の反対側でも挨拶ができたのが、拡幅後はそれができなくなってしまったのです。

その一方で、道路の拡幅工事中は、整備がまだ不十分なのに、交通量が増えたので、通り沿いの建物の1階は、随分ほこりっぽく、晴れれば「青山砂漠」、降れば「青山田んぼ」といわれていた時期もありました。

外苑西通り

南青山3丁目交差点から、青山墓地の西側を通り、西麻布交差点へとぬける外苑西通りは、昭和36～37年に拡幅整備されました。そのために、青山墓地のお墓が一部移動され、子どもたちは、作業員が骨壺を移動するのを、怖がりながら見ていたそうです。東北なまりの作業員は、掘ったところから出る水を「死人の水だぞ～」といって、子どもたちを怖がらせていたとか。怖がりながらも、子どもたちは興味津々で見ていたようです。

六本木通り

溜池から六本木、さらに渋谷へとつながる現在の六本木通りには、しもた屋が多く建ち並んでいました。その住民たちは、道路建設は国策だからと言って、比較的すんなりと郊外へ移転していったそうです。

「道路が完成するまでは、工事現場で働く人の飯場ができ、日に3度の食事をするので、お米の需要が高く、一番忙しく、景気もよかった」と語る米屋のご主人。周囲の商店もみな景気がよかったのではないかとのことです。

赤坂見附交差点（首都高速4号線）

昭和32年（1957）以前

オリンピック道路の建設前まで、弁慶橋周辺は、絵のような森や水の美しい佇まいが感じられたと言われています。まだ、家や車の往来もまばらなのがわかります

昭和40年（1965）

オリンピック関連道路の建設により、弁慶橋の前に、2本の高架道路が建ち、ダイナミックな近代的造形美を持った景観へと変化しました

平成26年（2014）12月

オリンピック開催から50年経ち、沿道の建物が高層化し、また、街路樹も大きく育っていることがわかります

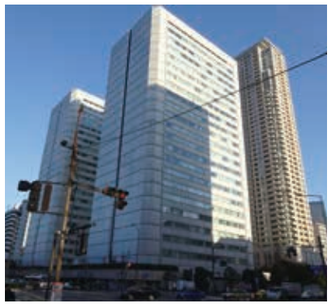
青山一丁目交差点

昭和34年（1959）

交差点角に地下鉄「青山1丁目駅」入口。その左手、通り沿いの木造家屋は、間組の社屋

昭和39年（1964）9月

翌年の東京オリンピックに向けて、急ピッチで工事が進む青山通り



平成26年（2014）12月

間組の社屋などの跡地に建った青山ツイン（昭和53年（1978）完成）。30年近く青山一丁目～赤坂御所周辺のランドマークとなっていたが、平成19年（2007）、倍近くの高さを持つ高層賃貸マンション、パークアクシス青山一丁目タワー（172m）が隣接地に完成しました

赤坂・青山住民にとっての東京オリンピック

東京オリンピックは青山通りの景観や住民だけでなく、当時の子どもたちの学校行事や日常の風景にも影響を与えました。

小学校の学芸会では「クーベルタン男爵」、運動会には五輪のマークが使われ、鼓笛隊が三波春夫のオリンピック音頭を演奏しました。

開催地の地元意識はつよく、中学生は競技観戦に招待されたり、開会式のボランティアとして、開会式に招聘されたりすることもあったようです。競技場に遊びに行った子どもたちは、はじめてみる背が高く、体の大きな外国人選手が笑顔で握手をしてくれてとてもうれしかったといいます。Oさんは、青山南町（現南青山）の住宅地の細い道をアベベ選手が練習で走っているのを見たそうです。

ブルーインパルスの輪

当時、赤坂に住んでいた都バスの運転手Oさんは、オリンピックに備え、聖心女子学院のマザーに英会話を習いに行ったと語っており、日本人の外国人アレルギーがなくなってきたのもこのころだと言われています。また、家の2階から見えた、ブルーインパルスの輪がとてもきれいで、ずっと消えないでほしいと願ったり、通りがかりに見た聖火がとても印象的だった事など、強い思い出として心の中に残っているようです。

中には、オリンピックを利用して、海外へ行くきっかけをつくった人たちもいます。日本に当時、まだ飛行機はなく、ドイツのルフトハンザ航空が、オリンピック選手を東京まで送ってきたその帰りの飛行機に、旅行会社が企画して、130人を募集しました。その飛行機が、オリンピック後に、東京へ選手たちを迎えに来る便で日本人旅行者は帰国することができたのです。月給が手取りで8000～1万円の当時、自分で行こうとすると100万円、その企画では安いとはいえ40万円の費用を、取引先などに借りてまでヨーロッパのファッションを仕入れに行った人たちがいました。

聖火リレーの中継点の今昔（青山一丁目交差点付近）：昭和39年（1964）　右：平成26年（2014）

開会式の日 聖火リレーが赤坂・青山をかけぬけた

占領下の沖縄に到着した聖火は、4ルートで全国をまわり、10月10日の開会式に向けて、7日から9日にかけて、東京都庁に集められました。9日、皇居二重橋前に設置された聖火台での集火式後、燃え続けた聖火は、翌日、14時35分、約16500人の観衆の見送るなか、二重橋を出発しました。この間、2人の女性を含む計7人の走者によって引き継がれた聖火は、桜田門、三宅坂、赤坂見附を経て、青山1丁目交差点付近で最終ランナーの坂井義則氏の手に託されました。その後、神宮外苑青山口から外苑に入り、更に円周道路に沿って右折し、権田原口、信濃町口を経て神宮プール（現在の千駄ケ谷コート）前まで沿道を埋め尽くす18万余の大観衆の中を駆け抜けました。Aさんは「ボーイスカウトのリーダーをやっていたので、場内整理要員として狩り出された。開会式の担当で坂井選手が聖火を持って階段を上がってくるのを場内整理そっちのけで見物した」と話します。

この日を待ちに待った観衆は、聖火リレーの沿道、開会式の会場である国立競技場内外に押し寄せましたが、家庭を切り盛りする女性は、家事で忙しく、オリンピックどころではなかったという声もありました。

取材こぼれ話 ～今もあるもの・今はないもの～

赤坂氷川神社の神楽殿と牛が曳く宮神輿

夏休みのいつもの風景。氷川小学校の子どもたちを中心に、毎朝のラジオ体操は赤坂氷川神社の神楽殿前に集合しました。

全員そろっての記念撮影が伝えるのは、子どもたちの元気な笑顔。

まさかこの神楽殿が昭和20年（1945）5月の空襲で焼失してなくなるとは……。

今この場所は神社のどの辺りかというと、ちょうどブランコのある辺り。秋の例大祭には、地域のお店で露天が並ぶ楽しい場所で、やはり笑顔があふれています。当時の宮神輿も焼失してしまいましたが、大きな神輿であったため、牛が神輿を曳く様子の写真も残されています。そして焼けずに残された「赤坂氷川山車」も復活し、毎年地域を練り歩き、平和なときを見つめています。

宮神輿

錨マークのラムネ工場

戦前の赤坂山王下通り（現赤坂通り）の現赤坂陽光ホテルのところに立っていた工場の正面に錨マーク。約300坪ものこの工場、今の「ホッピービバレッジ」が軍の御用で「いかりラムネ」を作っていたのです。

秀水舎として明治43年（1910）創業、大八車で赤坂の坂を押し屋さんに頼んでラムネ配達。ラムネは夏場だけということで、戦時に工場を疎開していた信州野沢で出会った「ホップ」を研究。戦後赤坂に戻ると昭和23年に国花の桜をマークに「コクカ飲料株式会社」として再出発。開発なったノンアルコールビールの名称は「ホップ」と「ハッピー」をかけて「ホッピー」に！　アメリカの瓶をリユースしていました。工場は45年（1970）年まであり、独特の匂いがしたそうです。

コクカサイダー

ホッピー工場

偽装の傷痍軍人

年末に上野のアメ横に買い物に行く時なんか母が「猫の手よりマシだ」っていって、荷物持ちに私を連れて行くんですよね。そうすると、そのころは浮浪児がいっぱいいました。

青中で赤い羽根を売りに行った時、いくつかのグループに分かれて、先生に「あなたはあそこに行きなさい」って。私は新宿の昔の西口の一番にぎやかな、交番の隣に4、5人で並んで「赤い羽根、ご協力お願いします」って叫んで売っていたんです。一番売り上げよかったんですけどね（笑）。

その交番の後ろで傷痍軍人たちが、背中に座布団入れたり黒いメガネかけたりして偽装しているのを見ちゃって。でも、そうでもしなきゃ生活できなかったんでしょう。おまわりさんたちもそれを許している感じなの。

木造店舗の和菓子屋と柳の木

青山通りを南に曲がった高樹町通りでは、道路拡幅の立ち退きがなかったため、街並みの風景は時代とともにゆるりと変わっていきました。背景には茶室のあるお屋敷を抱えていたこともあり、お茶席用の上生菓子を扱う和菓子屋は戦後の影響もあまりなく、御用の和菓子を作り続けました。向田邦子も愛したという上生菓子は、現在も多くの人に愛されています。周辺には大きなビルが立ち並び、街のようすが変化する中、今も変わらないのが「菓匠 菊屋」の趣ある風情です。店は昭和10年（1935）の創業時と同じ日本家屋の佇まい。街と店を見守る柳の木は代替わりしていますが、老舗和菓子屋の店頭では、いま、二代目柳がしなやかに枝をなびかせ、訪れたお客さんを出迎えています。

「菓匠　菊屋」と店頭の柳の木

赤坂・青山地区　区民情報　あの日あの頃

■人口推移（赤坂・青山地区）　（人）

	昭和29年	昭和35年	昭和39年	平成26年
人口	45,037	59,344	59,105	32,669
男	21,850	31,339	30,862	14,934
女	23,187	28,005	28,243	17,735
世帯	11,762	17,139	19,541	18,222

■港区の昼夜間人口（国勢調査）　（人）

	昼	夜
昭和35年	453,447	267,024
昭和40年	536,379	241,861
昭和45年	596,442	223,978
平成17年	908,935	185,732
平成22年	886,173	205,131

■港区外国人登録数（港区史）　（人）

昭和33年	4,234
平成26年	18,717

■港区立小学校　児童数・学級数推移

昭和34年9月　（人）

学校名	1年 学級	1年 児童数 男	1年 児童数 女	1年 児童数 計	2年 学級	2年 児童数 男	2年 児童数 女	2年 児童数 計	3年 学級	3年 児童数 男	3年 児童数 女	3年 児童数 計	4年 学級	4年 児童数 男	4年 児童数 女	4年 児童数 計	5年 学級	5年 児童数 男	5年 児童数 女	5年 児童数 計	6年 学級	6年 児童数 男	6年 児童数 女	6年 児童数 計	合計 学級	合計 児童数 男	合計 児童数 女	合計 児童数 計
旧赤坂	1	33	21	54	2	34	29	63	2	35	47	82	2	37	62	99	2	46	51	97	2	62	50	112	11	247	260	507
青山	4	120	89	209	4	117	104	221	4	120	107	227	5	150	134	284	6	155	147	302	7	195	175	370	30	857	758	1615
檜町	2	52	47	99	2	43	53	96	2	56	65	121	3	94	8	102	3	79	72	151	4	76	106	182	16	400	423	823
青南	3	86	78	164	4	115	92	207	4	118	98	216	5	158	120	278	5	155	134	289	6	196	141	337	27	828	660	1488
氷川	2	44	34	78	2	31	35	66	2	40	54	94	2	49	51	100	3	58	61	119	3	59	68	127	14	281	303	584

平成26年9月1日現在　（人）

学校名	1年 学級	1年 児童数 男	1年 児童数 女	1年 児童数 計	2年 学級	2年 児童数 男	2年 児童数 女	2年 児童数 計	3年 学級	3年 児童数 男	3年 児童数 女	3年 児童数 計	4年 学級	4年 児童数 男	4年 児童数 女	4年 児童数 計	5年 学級	5年 児童数 男	5年 児童数 女	5年 児童数 計	6年 学級	6年 児童数 男	6年 児童数 女	6年 児童数 計	合計 学級	合計 児童数 男	合計 児童数 女	合計 児童数 計
赤坂	2	26	31	57	2	17	41	58	2	30	22	52	2	44	17	61	2	33	35	68	2	31	23	54	12	181	169	350
青山	特別支援学級	4	1	5		1	1	2		2	0	2		3	1	4		1	0	1		1	1	2	2	12	4	16
	2	22	17	39	1	14	17	31	1	15	15	30	1	15	12	27	1	13	13	26	1	12	8	20	7	91	82	173
青南	3	51	33	84	3	47	37	84	3	42	49	91	3	49	43	92	3	41	43	84	3	56	36	92	18	286	241	527

■港区立中学校　生徒数・学級数推移

昭和34年9月　（人）

学校名	1年 学級	1年 生徒数 男	1年 生徒数 女	1年 生徒数 計	2年 学級	2年 生徒数 男	2年 生徒数 女	2年 生徒数 計	3年 学級	3年 生徒数 男	3年 生徒数 女	3年 生徒数 計
赤坂	5	149	99	247	4	96	67	163	3	80	83	163
青山	8	257	150	407	7	203	133	336	9	284	159	443

平成26年9月1日現在　（人）

学校名	1年 学級	1年 生徒数 男	1年 生徒数 女	1年 生徒数 計	2年 学級	2年 生徒数 男	2年 生徒数 女	2年 生徒数 計	3年 学級	3年 生徒数 男	3年 生徒数 女	3年 生徒数 計
赤坂	特別支援学級	2	1	3		1	0	1		2	1	3
	1	13	12	25	2	27	18	45	1	22	15	37
青山	特別支援学級	6	0	6		0	0	0		1	0	1
	2	23	22	45	2	33	21	54	2	38	22	60

◎「あの日あの頃」第2弾対象時期の背景を少しでも皆様に思い浮かべていただきたく、入手可能な情報を掲載いたしました。

あとがき

第1弾の「あの日あの頃」の発行から約2年間に渡り、多くの語り部の皆様から貴重なお話を伺いすることができ、この度お手元に第2弾をお渡しできることはメンバー全員の喜びとするところです。

皆様のご協力、誠にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

語り部の皆様のお話をお聞きすることは、それぞれの生きてこられた人生を語って頂くことであり、ひとつもおろそかにできない内容でした。各執筆者は一生懸命取りまとめを行ったつもりですが、限られた原稿スペースの中にすべてを収めることはとても難しく、割愛させて頂く部分も多くあったことをお詫び申し上げます。

さて、今回の表紙の色はブレ号に引き続き、「青い空の色」にしました。

今年は、平成27年（2015年）、戦後70年という節目の年に当たります。この青の色は、昭和20年8月15日、敗戦に打ちひしがれた日本国民が〝見上げたあの空の色〟を象徴しています。

流れ去る歳月を「昨日は今日の古（いにし）へ、今日は明日の昔」と詠った室町時代の古謡があります。これから5年、10年また更に20年経った後にこの赤坂・青山地区はどのように変貌しているのでしょうか。

それがどのように変わっていくにしても、この〝平和の空〟はいつまでも日本の、世界の空に広がり、そして聖火台に灯った希望の火は心の中でいつまでも消えないでいて欲しいものです。

平成27年3月
赤坂青山歴史伝承塾メンバー一同

協力者一覧

敬称略／五十音順

阿川君子　赤羽美代子　秋田俊典　朝川公雄　朝倉俊　生島惟好　伊倉栄一　石井恭子　石渡光一　泉宏　出野泰正　今川三千男　梅垣慶子　内田嘉一　恵川義昭　遠藤詳二　太田喜代子　太田二三子　岡本もも子　小川幸一　奥野和子　押田賢二　川口園子　川島信録　河辺初恵　北村吉一　久我美沙子　小出千代子　小林敬三　小原規与子　五味悦子　小山繁夫　佐伯修　佐々木宏美　佐藤さち子　佐藤政義　笹岡きみえ　澤孝一郎　澤村祥三郎　篠塚二美夫　下村宏　城所勇　菅谷利樹　鈴木よし子　鈴木克明　須田博　関根章高　高橋あい子　高橋淳子　高橋照雄　田中徳仁　津田和子　辻裕子　辻美見　土橋トシ子　土橋武雄　遠山秀子　戸田治子　利根川久男　永井正子　中谷良平　中里勝禮　西尾悦子　根本京子　練尾一郎　畠野裕之　林繁夫　日置むつ子　平田幸子　藤田薫　藤田孝子　細川邦三　穂積正泰　堀込一之　間下尚彦　松本芳夫　萬納幸江　水谷純男　水野統弘　三井寺吉雄　光田至秀　皆川實　峯崎恵紀　宮崎昭次　宮下正美　宮下淳子　村井保　本橋清美　本山登　森平八郎　八木達也　山口洋子　山田千代樹　山本忠雄

参考文献

青山近辺のお店の移り変わり【国部遠郎】
赤坂区史【赤坂区】
赤坂区詳細図（昭和12・16年）【日本統制地図】
赤坂小学校の120年【赤坂小学校同窓会・茜会】
赤坂ずっとけ芸者　お座敷ここだけの話【千代喜久　幻冬舎】
赤坂小史【山口證券】
赤坂そして氷川【氷川国民学校初等科昭和18年修了生有志】
赤坂ナイトクラブの光と影ー「コーラルテンクイーター」物語【諸岡寛司・講談社】
赤坂の空襲の夜、そしてその後【西荻三三会】
赤坂物語【河鍋淑子・都市出版】
いくたびの春秋【平田幸子・英撰舎】
おもいでの記【村沢紀度】
表参道が燃えた日【表参道が燃えた日編集委員会】
オリンピック東京大会の警察記録【警察庁】
開校・開園九十周年記念誌【檜町小学校・中之町幼稚園】
火災保険特殊地図【都市整図社】
花柳界はこんなところでございます。【西川ぎん子・PHP研究所】
歴史【青南33会】
聞き書き　みなと女性史【港区・みなと女性史をつくる会】
木村義雄先生を偲ぶ【氷川尋常小学校卒業生有志一同】
国勢調査　赤坂区【昭和10年】【東京市臨時国勢調査部】
古稀爆讃【青南爆讃会】
写真で見る東京・青山の記憶【青山を研究する会】
昭和史（戦後編）1945-1989【半藤一利・平凡社ライブラリー】
昭和が愛したニューラテンクォーター【山本信太郎・DU BOOKS】
昭和の歌謡史Ⅱ戦後編【福田　俊一・柘植書房】
昭和で見る「昭和の歌謡史」【王生萬・廣済堂出版】
昭和の東京地図歩き【宮藤陰介・文芸春秋】
職人衆昔ばなし【石井信一・洋泉社】
知られざる占領下の東京【石井信一・洋泉社】
新修港区史【港区】
政府統計の総合窓口ホームページ
1960年代の東京　路面電車が走る水の都の記憶【池田信・毎日新聞社】
戦乱と港区【港区】
増補　写された港区　四（赤坂地区編）【港区】
増補　区近代沿革図集　（赤坂・青山）【港区】
増補　非図書目録【港区】
創立50周年記念誌【赤坂青山町会連合会】
疎開学園物語【穂積勝・帝都出版】
第十回紅緑会公演パンフレット【全国芸能文化財連盟】
大日本職業別明細図（昭和11年）【東京交通社】
東京青山1940【田口道子・岳陽舎】
東京アンダーナイトー夜の昭和史【山本信太郎・廣済堂出版】
東京市赤坂区勢要覧（昭和12年）【東京市赤坂区】
東京シャドーナイト【杉良治・ベストブック】
東京人：特集【占領下の東京】【都市出版】
東京豊川沿革誌【豊川稲荷東京別院】
東京都立沼津戦時疎開学園要覧【穂積勝・都立沼津戦時疎開学園】
東京憐かしの街角【加藤嶺夫・河出書房新社】
東京の都市計画百年【東京都都市計画局】
東京六花街　芸者さんに教わる和のこころ【浅原須美・ダイヤモンド・ビッグ社】
七十周年記念誌【青南小学校】
ニッポン映画戦後50年【森　卓也・朝日ソノラマ】
氷川小学校　今、その歴史を閉じる時に【氷川の会】
百周年記念誌【青山小学校・青葉幼稚園】
復刻版大東京写真案内【博文館新社】
平和への願いを込めて【港区】
平和への願いを込めて2007【港区】
まち探訪ガイドブック【港区】
港区史上・下巻【港区】
昔の町会近辺【児玉昭太郎・南青山六七町会】
明治神宮外苑創建八年記念写真集【明治神宮奉賛会】
六本木水脈　六本木・赤坂・銀座「夜の帝王」と呼ばれた男の東京夜物語【杉良治・ベストブック】
私と町の物語上巻【港区】
私の赤坂Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ【津村忠彦・津村書房】
我等は海と松風と青ち【赤坂沼津学園同窓会】

まちの歴史伝承分科会メンバー

藤田薫　生島惟好　長井和人　新井秀之　石山恒子　臼井優子　及川廣子　観野福太郎　清澤暢人　兼坂智樹　高橋美沙子　千葉山泉　難波ひとみ　芳賀瑛子　橋口恵子　日野睦子　姫井雅夫　藤沢敦子　最上厚子　山本直洋

語り継ぐ赤坂・青山　あの日あの頃

平成27年（2015年）3月発行
編集：港区赤坂・青山地区タウンミーティング　赤坂青山歴史伝承塾
発行：港区赤坂地区総合支所協働推進課
東京都港区赤坂4-18-13　電話03-5413-7013
刊行物発行番号：26244-2035